社会福祉法人　千葉市手をつなぐ育成会　創立10周年記念誌

10th Anniversary

理　　念

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会は、知的障害のある人々が、地域社会の中で、人としての尊厳が重んじられ、本人の自己実現を支援することを理念として、次の具体的目標を掲げ、実践いたします。

○ 社会参加と生きがいのある活動

知的障害のある人たちがいきいきと生活できるよう日中活動の場を提供します。

利用者の「生きがい・生活の質・余暇の充実」を軸とし、社会参加を積極的に進めます。

○ 利用者と家族の支援

地域の知的障害のある人たちと家族のニーズを深く検討し、最良の方法を共に考えていきます。

○ 情報提供・自己決定・自己選択

支援者は、知的障害のある人たちの主体性や個性を尊重します。理解しやすいように情報を伝え、安心感と信頼感をもって自己決定ができるように支援します。

○ 情報公開の原則

地域住民の施設に対する理解と信頼を深め、地域と一体となって施設運営を行います。

社会福祉法人　千葉市手をつなぐ育成会

創立10周年記念誌

目　　次

理　　念

挨拶・祝辞

伊藤　　修（社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会　理事長）…… 2

熊谷　俊人（千葉市長）…… 4

大曾根元吉（千葉市立養護学校　校長）…… 5

鵜澤　峰子（千葉市立第二養護学校　校長）…… 6

石井　順子（千葉県立千葉特別支援学校　校長）…… 7

石井　克枝（千葉大学教育学部附属特別支援学校　校長）…… 8

島田貴美代（千葉市手をつなぐ育成会　会長）…… 9

堀越　ちい（千葉市手をつなぐ育成会　元会長）……10

久保田美也子（千葉市手をつなぐ育成会　前会長）……11

金澤　　務（社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会　顧問）……12

夏目　純一（社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会　でい・さくさべ施設長）……14

濵本　典子（社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会　でい・まさご施設長）……15

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会　10年のあゆみ

法人概要図……19

10年のあゆみ……20

日中活動パート・各事業の紹介……27

さまざまな活動・行事……47

それぞれからの声

保護者さんからの声……61

ボランティアさんからの声……67

利用者さんの声……70

創立10周年を迎えて

社会福祉法人 千葉市手をつなぐ育成会 理事長　伊藤　修

この程、当「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」が法人認可を受け、また知的障害者通所更生施設「でい・さくさべ」を開設し、10周年を迎えました。途中、同更生施設「でい・まさご」や「グループホーム」を開設するなどし、今日を迎えることができました。

これも一重に、開設まで大変ご苦労されました千葉市手をつなぐ育成会の皆様、保護者の皆様、地域の皆様、関係機関の方々、そして役員並びに職員一同が共に手を携えて、利用者の皆さんにとって少しでも安心して利用しやすい施設となるよう努力してまいりました結果と思われます。心より感謝申し上げます。

さらに、10周年を一つの節目とし、この記念誌を発行するに当り、千葉市長熊谷俊人様始め、多くの方々から心温まるご祝辞を頂き御礼申し上げます。

ところで、この10年の間、障害者の方々を取り巻く環境は大きく変化して参りました。

障害者福祉サービスについて、いわゆる措置制度から、利用者が受けたいサービスを選択し、契約に基づいてサービスを利用する支援費制度になりました。そして今は、サービスの費用を利用者にも負担を求める障害者自立支援法へと移行している最中です。

施設にとりましては、運営面も含めていかにスムーズに対応していくかが、大きな課題となっております。

しかしながら、最近の報道では、厚生労働相はこの自立支援法を廃止し、新たに「利用者の応能負担を基本とする総合的な制度」とすべく、抜本的な見直しを行っていくとしております。

現場の実態がもう少しわかっていれば、このようなことにはならなかったと思います。

今後、速やかに実施され、安心して利用しやすい制度となりますことを切に願っております。

次に、「ノーマライゼーション」について少し触れますが、今日障害者福祉施策は特定の人に対する限られたものではなく、一般的な施策として認識されています。障害のある人もない人も地域で共に生活している状態こそが普通であり、障害のある人もまた、家庭や地域において普通の生活を送ることができるようにすべきであるという「ノーマライゼーション」の考え方・理念は広まっています。

しかしながら、この「ノーマライゼーション」という言葉、我が国で使われるようになって既に20年以上経過しており、確かにエレベーターや点字ブロックなどハード面はかなり整備されてきましたが、意識の面ではまだまだ問題があるようです。

今年４・５月に内閣府が行った「障害者差別に関する国民の意識調査」の結果が先頃発表されましたが、それを見ると障害を理由とする差別は「あると思う」と「少しはあると思う」の合計が92％ありました。

また、障害者の雇用についてもなかなか進んでおりません。理念の実現にはまだ時間が掛かりそうです。

そのような中、最近私にとって少し嬉しいことがありました。

この夏のことですが、千葉市社会福祉協議会が主催しております学生ボランティア体験セミナーが、当「でい・さくさべ」で行われておりました。丁度、このセミナーに参加している中・高生10人ほどの皆さんが会議室で昼食を取っておりました。

その時、「皆さん暑い中、大変ですね、ご苦労さまです。」と声を掛けますと、一人の女子中学生が「楽しかった。大変じゃないです」と微笑んで答えました。他の皆さんも、同様に頷いておりました。

そして「皆さんは優しいのですね、これからもその気持ちを大切にして、ボランティア活動に参加してください。」とお願いいたしました。

私にとって、あのとき聞いた「楽しかった」と言う言葉は、大切な、また何か教えられる言葉でもありました。

今後も、こうしたボランティア体験セミナーが発展・拡大し、多くの方々に参加して頂くことを願い、また施設としても出来る限り応援・協力していくことにより「障害のある人もない人も共に暮らせる共生社会の実現」の一助になるのではと、考えています。

最後になりますが、当法人がこの様に10周年を迎えることが出来ましたこと、重ねて関係各位に心より御礼申し上げます。

また今後も、育成会の皆様と連携をとりながら、「でい・さくさべ」「でい・まさご」の両施設が利用者の皆さんにとりまして、安心して利用できる施設、また地域に開かれた施設であり続けられますよう職員共々努力してまいります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

祝　　辞

祝　　辞

千葉市長　熊谷俊人

この度、「社会福祉法人　千葉市手をつなぐ育成会」には、創立10周年を迎えられ、記念誌が発刊されましたこと、心からお祝いを申し上げます。

貴法人には、平成10年に法人として認可を受けて以来、「知的な障害を持つ人々が地域社会の中で人としての尊厳が重んじられ、本人の自己実現を支援すること」を法人の理念として、平成11年４月開設の知的障害者通所更生施設「でい・さくさべ」に始まり、グループホームの開設、さらには、２か所目の通所更生施設「でい・まさご」の開設など、今日まで、市民のニーズに応えて着実な事業の拡充に努めてこられました。

また、この間、相談支援事業や日中一時支援事業など、本市の知的障害者施策を積極的に受託・実施していただくなど、市内の知的障害者施設をリードする法人として、確固たる地位を築いてこられましたことは、歴代の理事長さんをはじめ、関係皆様方の熱意とご努力の賜物と存じ、深く敬意と感謝の意を表すものであります。

振り返りますと、この10年間は、国の障害者施策が大きく動いた時期にも当たります。平成15年４月、行政がサービス内容を決定する従来の「措置制度」に代えて、障害者自らがサービスを選択し、事業者との対等な関係に基づき契約によりサービスを利用する「支援費制度」が導入されました。さらに、平成17年10月には障害者自立支援法が成立し、翌18年10月には全面施行されましたが、サービスの利用者や事業者など、関係者からの様々な声を受け、現在、同法の見直しが行われており、今後の動向を十分注視していく必要があります。

このように、障害のある方を取り巻く環境が変化していく中にあって、本市におきましては、従来から障害者保健福祉施策の充実を市政の重要施策のひとつに位置づけており、「千葉市障害者計画」に基づき、「障害のある人もない人も共に暮らせる共生社会の実現」に向け、障害の特性やライフステージに応じた各種施策を積極的に展開しているところであります。

このような時、貴法人の日頃からの献身的な取り組みは誠に心強く、どうか、皆様方には、この度の創立10周年を契機として、さらに一致協力され、知的障害のある方の福祉の向上のため、さらには、本市障害者福祉の充実のため、一層のご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げる次第であります。

結びに、「社会福祉法人　千葉市手をつなぐ育成会」の今後益々のご発展と皆様方のご健勝・ご活躍をお祈りいたしまして、祝辞といたします。

祝　　辞

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会 10周年に寄せて

千葉市立養護学校 校長　大曾根元吉

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会が、設立10周年を迎えられ、記念誌を編纂されることは大変喜ばしく、これまでの皆様方のご努力とご苦労に深く敬意を表します。

育成会では、知的障害者通所更生施設、共同生活介護事業所の運営、千葉市相談支援事業所での生活就労全般にわたる相談等、様々な事業を展開されております。

本校でも、卒業生だけでなく数多くの在校生、保護者も大変お世話になっております。卒業後の進路先としてだけでなく、生徒のキャリア教育の一環として、施設の見学、説明等も行っていただいております。また、保護者との相談も率先して設定していただき、ともすれば、学校だけの相談では足りないところのバックアップなど、心強いものがあります。さらに、ホームページでの様々な情報の提供も有り難いところです。特に、広報誌は、教師や保護者にとっていろいろ役立つ情報が満載です。この記事を読み、子どもの支援の参考になったという話しを保護者から聞いたことがあります。

お出かけ情報「ちょいメモ」では、千葉市内だけでなく市近隣の公園、動物園、レストラン等の紹介があります。実際に、「でい・さくさべ」「でい・まさご」の皆さんが利用された上での紹介です。配慮や留意すべき点等も併記されています。休日や長期の休みの際に、家族で“ちょい”と足を伸ばし、安心して楽しめそうな印象を持てます。生徒たちの、余暇スキルを高める上でも利用を勧めて行きたいところです。

私事になりますが、今から２、30年前のまだ若かりしころ、小学校の特別支援学級（特殊学級）の担任をしておりました。その時に教えた子どもたちの何人かが成人し「でい・さくさべ」に元気に通っております。総会に招かれた際に、その子どもたちの保護者とお会いできることもうれしいところです。

さて、本校は年々生徒数が増加し、現在、182名の生徒が在籍しております。この生徒たち一人一人のニーズを的確に把握し、学校卒業後まで一貫して適切な教育的支援を行うため「個別の教育支援計画」を作成しています。生徒たちに適切な教育的支援を行うためには、福祉、医療、労働等の様々な側面からの取組が必要になります。そのため、関係機関の密接な連携協力を確保することが不可欠です。本校でも、千葉市手をつなぐ育成会とさらに連携を深め、地域で生活する一人一人の生徒の生涯にわたる支援を推進して行きたいと考えております。

終わりに、社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会には、これまで積み重ねられてきたことを基盤として、障害のある人たちの幸福と社会自立のための支援を充実されるとともに、本市の特別支援教育の充実と発展のために、より一層のご協力をいただくことを祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝　　辞

創立10周年をお祝いして

千葉市立第二養護学校 校長　鵜澤峰子

「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」の創立10周年、誠におめでとうございます。そして、障害者施策の変化を受け止めながら、障害のある人や家族への様々な支援活動に誠心誠意取り組んで来られましたことに尊敬の念を深くしております。

昭和30年に５名の親御さんの「親の会」の活動から発展し、８年もの長い年月をかけて「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」を立ち上げられたと伺っております。

法人としては、「でい・さくさべ」「でい・まさご」の２つの通所更生施設、「ケアホーム」の設立など、熱意と努力と手塩にかけた素晴らしい活動により現在があることを、改めて広報誌等を通じて感じさせていただいております。

障害のある人の生活も急激に変化を見せております。法人関係者のご努力により、障害のある人への理解や地域での社会参加も徐々に増えてきております。一頃とは隔世の感さえ覚えます。本校は知的障害のある子どものための教育機関です。子ども達の身体が健康であり、お互いに意思疎通のできること、感性豊かな生活が送れる基をつくることなどが身に付くように、保護者と一緒に力を合わせているところです。保護者の皆様はいつも真剣に頑張っていらっしゃいます。

子どもさんの力が伸びていく源の一つに、他との関わりが多い御家庭があげられるという話を聞いたことがあります。人は人と繋がって初めて育つ土台ができるのだと思わずにはいられません。貴法人の活動は、どれ一つとっても、「繋がる」「絆」「安心」「協働」です。この一体感を伴った活動が「相談支援事業」の実施や「日中一時支援事業」などであり、地域生活への支援や新たなサポートにとりかかられるのだと感動しております。

当事者及び関係者のお骨折りにより、障害者への理解は進んでいるとはいえ、未だ道半ばです。時として残念な出来事を耳にいたします。「理解しよう」と努力し続けることこそ、先ず、障害者本人でない者に求められることなのだと痛感いたします。障害のあるなしにかかわらず、人が人を理解し、共に育ち合う（育て合う）ことは、誰もが抱えている優しく且つ味わい深いものだと思います。

本校といたしましても、「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」の活動に幾分かでも御協力させていただき、今後貴法人のご活躍により障害者理解が更に進み、障害者が地域社会で末永く豊かに過ごせますよう念じております。

結びに、貴法人の御活躍、御発展を心よりお祈り申し上げます。

祝　　辞

創立10周年を祝して

千葉県立千葉特別支援学校 校長　石井順子

「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」が法人設立10周年の慶事を寿ぐ記念の年を迎えられましたこと、謹んでお祝い申し上げます。この10年の間に、本校の学区に貴法人の「でい・さくさべ」や「でい・まさご」が誕生し、文字どおり本校の在校生や卒業生の日中生活を支えていただき、保護者、教職員ともども、本当にお世話になってまいりました。歴代の理事長様を始めとする職員の皆様の本校に対する数々の温かいご支援に感謝申し上げ深く敬意を表します。

この数年間、障害児を取り巻く環境は変化の一途を辿っています。平成19年４月から特別支援教育が学校教育法に位置づけられ、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導及び必要な支援を行う特別支援教育がスタートしました。本校の名称も養護学校から特別支援学校へと変わりました。特別支援学校においては、長期的な視点に立ち、乳幼児期から学校卒業後まで一貫した教育的支援を行うため、「個別の教育支援計画」を活用した効果的な支援を進めることが求められています。本校では「個別の教育支援計画」を保護者の皆様とともに作成し、担任をはじめとして特別支援教育コーディネーターや進路指導主事が子どもを取り巻く関係の諸機関との連携を強めております。このような中で、本校の児童の放課後の生活や生徒の卒業後の進路先として子どもや家族を共に支えて下さり、また、福祉の専門的な見地からのご助言やご支援をいただき、合わせて研修会等でご指導をいただいてまいりました貴法人の存在は、とても有り難く心強いものがあります。

本校に着任して貴法人の方より、「つい数年前までは県立千葉特別支援学校の知っている先生と言えば進路指導担当の方でしたが、最近ではコーディネーター等、複数の先生が分かるようになり、子どもを取り巻く『チーム県千葉』を実感しています。」とのお話を伺い、とてもうれしく思いました。まさしく、一人の子どもを通して、顔と顔の見える関係とその深まりが築かれつつあることを実感しております。

これからも、特別支援教育の推進と障害を有する児童生徒一人一人が安心して暮らせる地域づくりを目指して、顔と顔の見える関係を大切にし、より一層の連携とご指導・ご支援をお願い申し上げます。貴法人の設立10周年を祝し、益々のご発展を祈念いたします。

祝　　辞

ひとりひとりの豊かな生活づくりのために

千葉大学教育学部附属特別支援学校 校長　石井克枝

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会の創立10周年おめでとうございます。地域のセンターとして役割を果たし、充実した活動を創り上げていることに敬意を表したいと思います。

〈子どもの力を信じて〉

私は千葉大学教育学部附属特別支援学校校長の石井と申します。平成18年度より校長として関わっております。大学における専門は家庭科教育講座の食物学です。附属特別支援学校に関わって障害を持つ子どもたちと初めてじっくり向き合いました。附属特別支援学校の子どもたちと学校生活を共にする中で、子どもの見方は大きく変わりました。本校の先生たちは「子どもたちには力がある」とよく言います。はじめはその意味がよくわかりませんでした。子どもたちが力を発揮できるように周りが配慮することで、子どもたちはいろいろなことができ、子ども自身も見る見る自信を持ち、意欲的にチャレンジしていく姿になっていきます。何もできないのは、できるようにしていないからだということに私自身も気がついてきました。

〈生涯にわたって主体的な豊かな生活のために〉

先日、テレビで知的障害を持つ人を雇用している会社が紹介されていました。チョークを作る工場で、最初はうまくできないところを学校の先生のアドバイスから、工場の機械の仕組みを少し変えてみると難なくできるようになり、長い間働いているとのことでした。人がつまずいているところを優しくどのようにすればできるのだろうと考えることは、仕事に人を合わせるのではなく、人に合わせた仕事の仕方を考えることが大切なのだと思いました。

障害を持つ子どもたちの生活を豊かにするにはご家族をはじめ多くの支援が必要です。ご家族にとっても地域に支援体制があることはとても心強いことです。現在の社会では、その支援体制はまだまだですが、貴法人のように親身になってくれるところがあれば、ご家族の方が一人で抱え込まず、みんなの支援の中に入っていけるのではないかと思います。地域の障害者の生活を支援するセンター的機能としても多くの方々に頼りにされ、役割を果たしていると思います。

〈これからの大いなる発展を期待して〉

貴法人は地域に開かれた施設として、社会への発信や障害者支援についての社会での指導的な役割を果たしてくれるものと思います。ひとりひとりの豊かな暮らしと生きがいを求めて、学校と地域との連携でひとりひとりが伸びやかに楽しく、自分の力を発揮して満足のいく毎日の生活ができるように力をあわせたいと思っています。これからますますのご発展を期待しております。

祝　　辞

10周年によせて

千葉市手をつなぐ育成会 会長　島田貴美代

この度、社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会が、法人設立10周年という記念の年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

千葉市手をつなぐ育成会の原点であります「親の会」は、昭和30年に設立されてから54年の歴史を刻み、この間に関係された方々のご努力は並々ならぬものがあったと推測されます。知的な障害のある人の教育を受ける権利の確立から始まって、その親の思いと活動精神が受け継がれ、長年にわたる活動の実績と信頼が実を結んで社会福祉法人格を取得し、社会福祉事業に発展されました。

現在、法人の事業施設である「でい･さくさべ」「でい･まさご」は、地域の福祉拠点として大きな役割を果たしています。生活スタイルの変化により、支援の多様化を求められる中で、さまざまな工夫をしながら、ひとりひとりに合わせた支援に取り組まれています。日中活動の作業も、施設長はじめ職員の皆様のご努力で安全な環境を整えていただき、働く喜びを感じながら取り組むことができます。

また、グループホームも開設され、生活支援の面でも安心できることは親としての念願であり、とても心強く思っております。

そして、施設を地域の人の交流の場として開放されていることは、障害に対する偏見をなくし理解の輪を広げる近道であると思います。本人を中心に、いろいろな人が関わって生活していくことで地域福祉の意識が向上し、やがては社会参加、社会自立につながっていくのではないでしょうか。

少子・高齢化の時代に入り、国の財政が厳しくなる中、障害者自立支援法が施行されてから３年が経過しました。しかし、知的な障害のある人が、住み慣れた地域で安心してあたりまえの暮らしをしていくには、まだまだたくさんの課題があります。

サービスを提供する側の事業体としての法人育成会と、利用する側の親の会である育成会は、車の両輪として協力し合い、連携を密にしながらともに取り組んで参りたいと存じます。

最後になりましたが、社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会の今後のますますのご発展と皆様の幸せをお祈り申し上げまして、お祝いのことばといたします。

祝　　辞

祝　　詞

千葉市手をつなぐ育成会 元会長　堀越ちい

この度、社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会創立10周年を迎えられましたこと、本当におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

10年前の法人設立までを振り返り、当時のことがいろいろ思い出され、懐かしく感じられます。

まずは、社会福祉法人格を取得するには、準備金として１億円の資金が必要でした。育成会の財産は当時8,000万円で、不足分は会員各位の寄付金でまかないました。

そして、当時の千葉市担当行政の課長様に、施設（でい･さくさべ）建設予定地を案内して頂きました時、千葉都市モノレール作草部駅より数分の、交通至便なあまりにも素晴らしい場所で、驚きと喜びに空を仰ぎながらにじみ出る涙が止まりませんでした。

また用地の整備につき育成会々員の皆様のご協力を頂くため、臨時総会を開催し会員各位にご奉仕（整地作業）をお願いしました。

千葉市には福祉団体が多数ございますが、法人格の取得から、「でい･さくさべ」を誕生させた育成会々員の皆様の日頃の懸命の努力には、深く感謝しております。

そして、私には荷がとても重すぎました法人格取得と施設建設という大きな事業につきまして、当時、中野学園々長の金澤務様に、ご指導頂き大きなお力をお借りいたしました。本当に助かりました。

長年育成会の活動に参加してきた立場として、この機に育成会の活動についても思い出されます。

昭和30年当時、千葉市教育長の長谷川喜三郎先生をお尋ねしたことがありました。知恵遅れの子らの教育を考えて下さり、大森小学校に小井戸博先生が担当された特殊学級第１号が生まれました。その後、蘇我中学校に大石三郎先生が担当された特殊学級ができました。さらに昭和39年には市立養護学校が誕生し、昭和53年には市立第二養護学校が轟町に誕生しました。

このように知的障害を持つ子どもたちの教育環境は確実に整ってきましたが、卒業後の社会自立に関しては全く閉ざされておりました。軽度のお子さんは、学校で職業を斡旋してくださいますが、重度になると在宅よりいたしかたありません。当時の市長さんにお目にかかり、実情をお話して間もなく、昭和61年に千葉市ワークホームの誕生となりました。

今では、法人施設に通う利用者はもちろんのこと、保護者の皆様方の晴れやかな、清々しい笑顔を眺めるにつけ、共に喜びを痛感しております。

今後益々のご発展と利用者はじめ、皆々様のご健勝、ご多幸をご祈念申し上げまして、ご祝詞に代えさせて頂きます。

祝　　辞

これからの道 どんな道

千葉市手をつなぐ育成会 前会長　久保田美也子

創立10周年おめでとうございます。早いもので…と続くのが定型句かと思いますが、育成会（親の会）の理事で、社会福祉法人格取得に関わった者は私だけになったのが５年前。何を話しても、それは私の思い出話に過ぎなくなりました。年月は確かに流れたということだと思います。

平成２年、花見川区三角町で「おはしの家」を始めました。ある会社から「仕事と場所を提供するから、障害者の働く場にしないか」というお話をいただいたのです。まずは親がやってみようということで、賛同する50数名の会員が週４日交代で、割り箸の袋詰めに通いました。会社の敷地内に16坪のプレハブと設置式の簡易トイレ。こんなところでも、会員は「子どもの進路ができる」と喜びました。３年ほど続いたと思いますが、今、思うと実現するはずはなかったのかも。でい・さくさべと比べたら天と地の差です。

開所したでい・さくさべの定員がどんどん埋まって行くのを見て、来年からまた行き場のない人が出る。資金作りに協力してくれた在校生会員がいる…と、複雑な気持ちといたちごっこ感を持ったのを覚えています。

それから、会員のＳさんが利用希望をしてこなかったことも。過日、法人格取得の、私にとって同志の一人である井上副会長（当時）と話していて、井上さんもＳさんのことが気にかかっていることを知りました。

資金作りの募金に、毎月数万円単位で振り込んできてくれました。合計で百万円を超えた記憶があります。当然、利用希望をしてくると思ったのに申し込みがないので、電話をしてみました。やっと、本人がなじめる場所を見つけ、そこを週に１～２度利用して、あとはお母さんと畑仕事をしているとのこと。公務員のご家庭です。「それなのになぜ、こんなに寄付をしてくれたの」と聞くと「必要なことだから」と短い答え。井上さんも私も、今でもＳさんのことが気になっています。

法人は今、隣接の土地に新規事業を考えています。今までの千葉市にはなかったようなものをと、育成会は希望しています。「今までになかったようなもの」とは、建物の仕様であったり、手法であったりするでしょう。法人の職員も「こんなのはどうだ」とか「こういうものをやりたい」と思っているかもしれません。

手元に、ある季刊誌があります。権利擁護関係の斬新な冊子です。北海道や大阪、愛知などの若い福祉職の方々の座談会が載っています。福祉はダサい、暗いと思っていたり、障害者を差別的に見ていた人たちのようです。その人たちが、意表を突く（彼らにはごく普通の）発想で、やっていけないと言われる障害者福祉の経営を成り立たせて、面白く支援をしている様子が手に取るようです。

「福祉の向こう側とこっち側」ではないやり方、時代になりつつあると、全国に目を向けると感じます。私たちはどう進むのか。これからがまた楽しみです。

法人10年の歩み

社会福祉法人 千葉市手をつなぐ育成会 顧問　金澤　務

十年一昔と言いますが、昔より現代の方が時間の進み具合が早いような気もします。

そう言っても10年経つと、「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」はどのようにして誕生したか、その時の理念は？それらについて知らない方も増えてきました。このような状況から、最初に、法人の歴史を駆け足で述べてみることにします。

これまでも法人開設５周年記念の時、設立の経過・考え方を法人の広報誌に記しました。また、千葉市手をつなぐ育成会「創立50周年記念誌」にも同じ文章が登載されました。

法人設立10周年と言いましても、社会福祉法人認可になるまでに色々と困難なことがあったが故に、私にとって、認可前の時期の思い出の方が強く残っているのです。当時の日記帳を読み返して見たのですが、激しい言葉による記述が並んでいました。当時の私の気持ちは尋常ではなく、先の見通しもなく、その焦りのため気持ちをどこにぶつければいいのか、心が荒れていたのでしょう。

私が「社会福祉法人千葉市育成会設立準備委員会代表」に選ばれたのは平成４年９月４日でした。法人認可は平成10年６月29日、法人登記は同年７月７日です。

育成会の法人の理念は、育成会の総会で「会員は我が子のみの幸せを考えるのではなく、知的障害のある人達の幸せを願い、障害のある人、ない人が共生し、偏見、差別、侮蔑のない地域社会をこの千葉市に築きあげ、その実践活動を通じ真の福祉文化を構築していくことこそが、個々の会員の義務であり責任というべきである。以下省略」の理念が決議されました。今、言われているインクルージョンの理念です。

社会福祉法人の認可への作業は、実現に６年が経過してしまいました。当時、私の力の弱さのため、何をやっているんだと思われていられるであろう育成会員の方々に大変申し訳ない気持ちでおりました。

このような時期、平成８年２月29日、当時の市長さんのご意向で、最高のロケーションとも言える現在の土地を無料貸与するという内示があったのです。この内示があった時、欣喜雀躍、今までの苦しみが嬉しさに変わったのです。

ここに至るまでの千葉市関係者のご配慮は決して忘れてはなりません。

また、当時の「市障害福祉課の職員」の皆様、「千葉市手をつなぐ育成会会員」のご尽力に感謝し、その事実が忘却の彼方にならないよう、ここに繰り返し述べておきます。

〈現在の契約制度についての疑問〉

社会福祉法人の認可をうけてから、僅か10年の間に知的障害者の福祉制度が大きく変わりました。その中で、措置から契約というのが一番の変化でしょう。障害者、特に知的障害、精神障害のある人々にとって契約といっても、その意味とか内容については殆ど分からないのでは、このような言い方は失礼ですが･･･。意思能力に問題のある人に対して厚労省は「成年後見制度」を利用すればよいとの考えです。

私は、本人の意思の尊重・自己選択を大切にしなければならないと言い続けてきました。これからもそれを言い続けていきます。

契約という行為は、福祉サービスの購入者として、本人達の自己選択の自由が広がったと当初は喜びました。しかし、考えて見ますと主体的に福祉サービスを選択し契約できる人達

は、一体どの位いるのでしょうか。精神障害者も加えて何十万人もいるのです。冗談じゃない、これらの人達全員が、成年後見制度を活用することができるとお考えですか、と厚労省に申し上げたいのです。契約制度の下では殆どの人は「成年被後見人」とならざるを得ないでしょう。そうなると「身上監護」はどうなるか、極端に言えば成年後見人の考える人生になってしまう恐れがあります。民法には「被後見人の意思の尊重」の規定があります。しかし、法律に規定されているからといって安心はできません。

現在は親が後見人になっていることが多いのですが、親亡き後、何時かは第三者後見人を選任しなければならないことが出てくるでしょう。そうなると報酬という費用が生じ、法人後見の場合、月３万円として１年36万円、10年で360万円の報酬を支払らなければなりません。自立支援法の制度では本人負担の10%の利用料負担の外、家賃、光熱水費、食費も自己負担、成年後見人に対する報酬を加えると障害基礎年金だけで生活費は賄えないことは明白です。

〈障害の程度区分の疑問〉

障害の程度区分についても、療育手帳、障害基礎年金、障害者自立支援法の障害程度区分の三者はそれぞれ違っています。１人の障害者に３種類の評価があるのです。１者３評価といえましょう。同じ人間にこんなことがあってよいのでしょうか。憲法25条違反ではないかと大声を出したくなります。

また、障害者自立支援法による福祉サービスを受けるには障害の程度区分の認定が必要です。106項目の質問に従ってランク付けをすることになっているのですが、障害者の能力は多種多様です。このような形でサービスの種類と量が決められるはずがありません。これは正に財政負担の引き締めの結果です。

〈障害者自立支援法によって自立は可能か〉

障害者自立支援法…いい響きです。「自立を支援する」ということは一見素晴らしいことのように思えるのですが、障害者にとって必ずしも有り難い内容ではありません。要するに「国の財政がもたないので、あまり障害者に回せませんよ」と言っているのだから。

措置の時代は無料だったサービスが有料になりました。原則的に１割（現在応益負担）を負担して下さい、と言うようになっています。それに各種福祉サービスによっては、食費等の生活費も負担しなければなりません。

このように国の負担を減らすだけでなく、「働ける人は働いて下さい」ということで、自立とは「働くことだ」と定義しているように感じます。自立とはそれだけではないのに…。

現在の日本の政権は民主党に変わりました。どのような理念に基づいて政策を出すのかサッパリ分かりません。マニフェストを見る限り自立支援法は廃止、新しい法律を提案するようですが、少なくとも、現在の制度よりいいものができるだろうと期待しています。

〈さいごに〉

古くて新しい問題ですが、親亡き後のことです。親の心配をどうしたら無くせるか。建築基準法や消防関係法令等の改正でグループホーム・ケアホームの整備が難しくなり、整備の仕方を考え直さなければなりません。

もう一つ、地域で生活している知的障害者で福祉サービスを受けていない（制度を全く知らない人達）親の中には我が子をどうしたらいいのか、分からない親が未だに存在していることです。このような立場にある人達に福祉サービスを紹介したり、就職先を探したり、その人の権利をどう守って行くか、これらをワン・ストップで相談・支援ができる、これは大切なことです。法人は、千葉市の障害者にとって大きな拠り所になっているのです。このことを何時も心の中にとどめ、その実践を通じ千葉市の福祉文化を育て上げる中心として活躍してほしいと願っています。

ご　挨　拶

社会福祉法人 千葉市手をつなぐ育成会 でい・さくさべ施設長　夏目純一

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会設立10周年という節目に当たり、関係各位には衷心より感謝申し上げます。

特に、昭和30年に発足した育成会活動に携わり法人格取得に尽力された方、そしてその強い意志を受け継いでいる方々には敬意を表します。また、当時法人設立準備室を中野学園に設置し法人認可のためにバックアップしていただいたことも強い味方でした。

さて、この10年は変革の時代であり、利用者・家族は戸惑いの時代でもありました。次の時代もまた大きく変わるようですが、法人を核に施設現場からの発信力と行動力がより必要になることは確かです。以前、千葉市にグループホームがない時代なんとか１号を設置するため、施設職員が関係機関に対し必要性を発信し、他の政令市に情報収集等を実施したことでグループホームをスタートしたことがあります。また、現在利用者・家族には使い勝手の良い日中一時支援事業として事業化されていますが、これもまた、制度が無い時代に施設独自にレスパイトとして早朝や活動外の時間に利用者をお預かりしました。

施設からの発信力と行動力が現在の事業として日中預かり、放課後対策に繋がったと思っております。

昨今、施設を利用する児・者の様相が変わり、施設現場へのニーズも変容してきています。しかし、地域で拠点となる施設等の役割は変わっていないはずです。私たちの使命は、施設等を利用する一人一人に関わり、その人たちの人生が地域社会の中で人としての尊厳が重んじられ、本人の自己実現を支援することです。トイライブラリーで幼児期に出会い、放課後対策で学童期を過ごし、相談支援・就労支援・日中活動等で成人期に関与していく。点から線そして面へ、このプロセスは変わるものではありません。

法人創立10周年を機にこれまでの足跡を振り返り、また次への歩みを意識する研修会も開催いたします。関係各位には御指導、時には御叱責を戴きこれからの10年に向けてより良い障害児・者への支援を実施していく所存です。

過去から現在そして未来へ続きます。ありがとうございました。

法人の未来に捧ぐ

社会福祉法人 千葉市手をつなぐ育成会 でい･まさご施設長　濵本典子

法人設立10周年を迎えるにあたり、利用者家族・関係機関の皆様には深く感謝いたします。感謝の意を未来への展望に代えてお礼の言葉とさせていただきます。

「通所更生」という名称が耳新しかった時代、「地域」という言葉など誰も口にする人はいませんでした。指導や療育がまかり通っていた時代に、私は福祉の世界に足を踏みこみました。遥か25年以上も前のことです。

法人設立10周年に臨み、来し方行く末を考える機会に至りました。通所更生とデイサービスでスタートした法人が、今や様々な事業を展開しているだけではなく、数え切れない程多くの方々と関わるようになりました。千葉市手をつなぐ育成会の会員の皆さんは元より、千葉市に住んでいる多くの方々の声に応えることを使命として、法人は成長し続けてきました。その原動力が、法人理念である『地域に開かれた施設運営』です。

この理念のもと、『でい･まさご』も開所から５年目を迎えました。この５年間は、『でい･さくさべ』と同様、真砂の地にどのように馴染んで溶け込んでいくのかを考える月日であり、念頭には常に「地域」がありました。

ビルの中の施設という限られた空間の中で、土がない、土地がないことをどのように工夫して、利用者の活動を行っていくのかが課題となりました。この課題への挑戦が、施設の外の世界に踏み出すことに繋がり、地域への関わりを後押ししてくれました。その第一歩は、真砂の地域への清掃活動です。昨年からは近隣の中学校で畑を耕し、野菜作りも行っています。海岸も近いことから、稲毛の浜の清掃活動もボランティアさんとともに展開できています。このような活動を通して、地域の方々に受け入れられていることを日々実感するに至りました。

障害者自立支援法が施行され、「地域生活」＝「施設解体」のように叫ばれてしまったことは、誤った解釈ではないでしょうか。一口に「地域」と言っても、それを明確に伝えることは難しいことですし、利用者・家族の未来を支えることができるサービスが提供できなければ、「地域生活」を語ることはできないとも思っています。

法人の未来に向けては『地域に開かれた施設運営を目指す』重さを法人全体で担ってほしいと提言します。来し方は順風満帆、行く末は果たしてどうだろうと考えた時に「地域」が浮上します。先人の功績を、ただ踏襲して歩むのではなく、新たに歩みだす第一歩は、法人職員が自分たちの力で「地域」を考えた第一歩になることを期待しています。

遥か昔「地域」という言葉に縁がなかった私が、今やこの言葉を日常的に耳にするようになりました。この言葉の本質とはまだまだ距離のある実践ではありますが、今後もその実績づくりを法人職員と共に考え、歩んでいくことをここに宣誓します。

社会福祉法人　千葉市手をつなぐ育成会

10年のあゆみ

法　人　概　要　図

千葉市手をつなぐ育成会

昭和30年発足
会員数６９７名
（平成21年度6月1日現在）

- 評議員会
- 理事会
  - 顧問
  - 監事
- 理事長
- 常務理事

でい・さくさべ

- 知的障害者通所更生施設でい・さくさべ（定員60名）
  - あしあと
  - オーチャード
  - サンライズ
  - まんまる
  - 万屋
  - カシオペア
- 生活介護事業でい・さくさべ（定員20名）
  - あんず
  - 木の実
  - はばたき
- 日中一時支援事業
  - 日中預かり型（定員10名）
  - 放課後対策型（定員５名）
- 千葉市障害者相談支援事業所でい・さくさべ（千葉障害者生活支援センターふらる）
- 千葉市障害児等療育支援事業
- 指定相談支援事業所でい・さくさべ
- 共同生活介護事業でい・さくさべ
  - ゲンゴロウ
  - あめんぼ
  - ホタル

でい・まさご

- 知的障害者通所更生施設でい・まさご（定員30名）
  - 大空
  - ほかほか
  - めばえ
  - まつぼっくり
- 日中一時支援事業
  - 日中預かり型（定員５名）
- 千葉市障害児等療育支援事業

（法人受託）

- 千葉市トイライブラリー事業

10 年 の あ ゆ み

年 度	出 来 事	社 会 情 勢
平成10（1998）年度		
6月29日	社会福祉法人「千葉市手をつなぐ育成会」認可（7月7日登記）	6月　FIFAワールドカップフランス大会　日本初出場
3月25日	知的障害者通所更生施設「でい・さくさべ」竣工式 あいにくの雨にも関わらず、市内、県内よりたくさんのお客様が出席してくださいました。	
平成11（1999）年度		
4月1日	でい・さくさべ開所 知的障害通所更生施設　定員50名 千葉市在宅知的障害者デイサービス事業　開始定員15名 巡回・外来相談事業　開始 職員は2週間前からまっさらな施設で開所の準備をしてきました。最初の50名の利用者を2回に分けて受け入れを開始しました。	10月　2千円札発表 【福祉の出来事】 11月　地域福祉権利擁護事業が始まる（都道府県社協）
平成12（2000）年度		
	障害児（者）レスパイトサービス事業開始	9月　シドニー五輪開幕 【福祉の出来事】 4月　介護保険制度施行 4月　改正成年後見制度施行 5月　社会福祉法成立　住民を主体とする福祉を定める 1月　中央省庁再編により厚生労働省発足
平成13（2001）年度		
	旧千葉市障害児（者）レスパイトサービス事業	9月　東京ディズニーシーオープン 9月　アメリカ、世界貿易センタービルにて同時テロ 2月　ソルトレーク冬季五輪開幕
4月	生活ホーム「ゲンゴロウ」開始	

10 年 の あ ゆ み

年 度	出 来 事	社 会 情 勢
	まさに生活ホーム（グループホーム）にぴったりの物件が見つかりました。	
6 月	堀越ちい理事長退任、金澤務新理事長就任	
10月	知的障害者地域生活援助事業 「ゲンゴロウ」開始	
平成14（2002）年度		
4 月	グループホーム「あめんぼ」設立	5 月　FIFAワールドカップ日韓大会 日本代表決勝トーナメント進出 10月　拉致日本人の５人、24年ぶりの帰国
10月	知的障害者生活支援事業開始	
平成15（2003）年度		
	支援費制度開始 “措置から契約へ”の転換点。利用者のみなさんに、サービスのことを分かりやすく伝えるために、文章の表現に気をつけ、イラストや写真を多用したサービスガイドを作成しました。	4 月　日本郵政公社発足 9 月　十勝沖地震 12月　地上デジタル放送開始 【福祉の出来事】 4 月　障害者支援費制度施行　需要の盛り上がりで予算不足となり補正予算で対応

10 年 の あ ゆ み

年 度	出 来 事	社 会 情 勢
平成16（2004）年度		
4 月	でい・さくさべ　知的障害者通所更生施設　定員60名へ増員	8 月　アテネ五輪開幕 10月　新潟中越地震 11月　1万円、5千円、千円札の新紙幣発行 3 月　愛知万博　通称「愛・地球博」開幕 【福祉の出来事】 12月　発達障害者支援法成立　学習障害などを新しい障害として定める
平成17（2005）年度		
4 月	千葉市トイライブラリー事業受託	2 月　トリノ冬季五輪開幕 3 月　王ジャパン　ワールドベースボールクラシック初代王者 【福祉の出来事】 11月　障害者自立支援法成立
4 月	知的障害者通所更生施設　でい・まさご設立　開所30名 ビルの賃貸物件を利用して施設を開所しました。 	
平成18（2006）年度		
4 月	「あめんぼ」移転 作草部の物件から転居しました。移転先を探すのには大変な苦労でしたが、千葉駅至近の好立地の物件に巡り合えました。	6 月　後期高齢者医療制度成立 6 月　FIFAワールドカップドイツ大会開幕 【福祉の出来事】 4 月　障害者自立支援法一部施行 介護給付費の一律一割負担を導入 障害程度区分導入 10月　障害者自立支援法本格施行

10 年 の あ ゆ み

年 度	出 来 事	社 会 情 勢
9 月	でい･さくさべ 知的障害者短期入所事業・児童短期入所事業廃止	
9 月	でい･さくさべ 千葉市在宅知的障害者デイサービス事業　廃止	
10月	でい・さくさべ 障害者自立支援法の施行をうけて指定申請 旧法通所更生施設・生活介護事業・共同生活介護事業 千葉市障害者相談支援事業　Ｂ型 千葉市障害者相談支援事業　Ｃ型 千葉市地域生活支援事業　（日中一時支援事業日中預かり型） でい・まさご 障害者自立支援法の施行をうけて指定申請 旧法通所更生施設	
平成19（2007）年度		
		7 月　新潟県中越沖地震 【福祉の出来事】 9 月　国連「障害者の権利条約」に署名
平成20（2008）年度		
1 月	共同生活介護事業　「ホタル」開所 	3 月　原ジャパン　ワールドベースボールクラシック連覇 6 月　岩手・宮城地震 8 月　北京五輪開幕 9 月　米証券大手リーマンブラザーズ破綻　世界金融危機の急速な進行
5 月	でい・まさご 千葉市地域生活支援事業（日中一時支援事業日中預かり型）開始	
7 月	金澤務理事長退任、伊藤修新理事長就任	
10月	でい・まさご千葉市障害児等療育支援事業開始	

６ＬＤＫの物件がでい・さくさべ至近に見つかりました。

日中活動パート

各事業の紹介

あ　し　あ　と　―でい・さくさべ―

平成11年４月、でい・さくさべの陶芸を行うグループとしてスタートしました。どんな形でも作品として残せる陶芸の良さを生かし、きれいに作品を創ることだけにこだわらず、利用者それぞれの個性が出せるおもしろい作品が創れる活動を目指しました。

始めは、粘土に興味を持ってもらうことに視点を置き、創りたいものを絵に描いてから粘土に触れていきました。型を使って作品を創ることを経て、次第にイメージする作品を創れるようになっていきました。利用者自身にその実感が積み重なると、「さらに良い作品を創りたい」意欲が生まれ、さらにレベルの高い作品へとステップアップしていきました。利用者のレベルアップに合わせて、電動ろくろを導入して成形の完成度を高めたり、顔料を使って作品に絵や文字を描き、自分のイメージをより作品に出せるようにしたり、作品を焼いたときに深みがある色を出せるように、釉薬の研究を重ねたりと、それぞれに合った陶芸技法、陶芸道具を模索し、試行錯誤を重ねながら個性を引き出せる方法を見つけ出してきました。利用者がイメージしている作品を創るために、どのような方法で、どのような道具を使えばよいか？は今でも変わらない課題です。

毎年千葉市美術館で行われるアートフレンズ展は、たくさんの人に自分の作品を見てもらう重要な機会です。アートフレンズ展への出展を目標に創作意欲も高まり、数々の個性的でおもしろい作品を出品してきました。「アートフレンズ展に作品を出品しよう」という思いは、あしあとの大きな目標のひとつです。

わきをしっかり閉めて！電動ろくろでの成形

個性的な作品がたくさん

オーチャード　―でい・さくさべ―

平成11年に食に関する活動を中心としたグループとして、オーチャードの活動は始まりました。

主に利用者が食堂で食べる昼食の準備を行う活動と調理活動を行ってきました。昼食準備は開所当時から続けて行なっており、手順を守る、報告をして確実に進めることを視点に、皆が食べる昼食の配膳、盛り付け、調理を行いました。

調理活動はクレープやクッキー、パウンドケーキといったお菓子から、副菜のコロッケやスープ、主食のパンまで幅広く作っていました。利用者にとって分かりやすく、作った物を活用するということから、販売のためのパン、昼食で提供するためのコロッケ作りに絞っていきました。パウンドケーキは販売だけでなく、利用者向けに「オーチャードの喫茶店」でも提供しました。

パンの成形作業の様子

平成20年5月から、昼食が外部委託となったことに伴い、調理活動と並んでもう一つの柱であった昼食準備が大幅に縮小され、活動の大きな柱はパン作りとなりました。食べ物を作る喜び、作ったものが売れる喜びは、とても大きいものがあります。少しでも多くその喜びを感じられるように、パン作りや販売の機会を増やしています。

「いらっしゃいませ！」パン販売は毎回好評です

オーチャードのパンは、計量から生地づくり、成形・分割・袋詰めまで一人一人が役割を分担し、心を込めて作っています。役割が決まっていることで、それぞれが活動に対して責任を持つことが出来ています。同時に、みんなで1つのパンを作る達成感や、自信に繋がっています。

サンライズ　―でい・さくさべ―

現在のサンライズのルーツは、「はばたき」です。平成11年度からはばたきの中で、缶回収や地域清掃、園芸を中心とした活動を行う「サンライズ班」として存在していましたが、平成13年に日中活動パート「サンライズ」として独立しました。

「体を動かしてみんなに認められる機会を作ろう！」手先を使った細かい作業より、ダイナミックに体を動かすことが得意なメンバーが大半で、暑い日も寒い日も、毎日外で活動しています。

「自分達はボランティアを受けるだけでなく、ボランティアをする立場にもなれる」といった受ける立場から提供する視点を大切に、作草部駅周辺や千葉公園の清掃活動を続けてきました。すると地域の方から「ありがとう」と声をかけて頂く機会も増え、活動のやりがいに繋がりました。でい・さくさべの広告塔として地域にアピールするこの活動は、現在でも行われています。

地域の皆さんに声をかけていただける、地域清掃

でい・さくさべの玄関を飾る色とりどりの花壇も、サンライズの作品の一つです。一生懸命土を掘ったり運んだりと、土作りにかける労力は大変ですが、「綺麗ですね」という一言が利用者の喜びに繋がっているのです。こうした地域の方々の存在に支えられ「自分にも出来る」と自信を得た彼らの姿はとても輝かしいものがあります。

個人のお宅にもお花を届けています

まんまる　―でい・さくさべ―

まんまるは、平成11年から８名の利用者でスタートしました。グループ名は、「角が無く、柔軟性や対応力を持ち合わせた、グループであって欲しい。」と思いを込めてつけられました。

当初の活動内容は、刺し子･ステンシル･結び織り・染色・ミシン他、様々な活動に挑戦しました。

日々活動を積み重ね次第に、結び織りは大きな作品ができるようになり、「作ったものを展示する」という目標ができました。でい・さくさべの館内に展示することから始まり、更にさわやか芸能発表会やアートフレンズ展といった外部の展示会にも作品を出展しました。

図案をもとに、結び織り

年月を重ねることによって、利用者・職員共に技術や知識も高まりました。作品の質も向上し、展示のみではなくハロー！でい・さくや福祉ショップ、他施設のバザーにも「商品」として販売できるようになりました。

そして、平成19年度には、結び織りから機織りが活動の中心に変わっていきました。活動の変化にも柔軟に対応し、現在は８台の織り機を稼働させています。織った生地は、ティシュカバー・ショール・鍋つかみなどの作品に仕上げ、機織りの作品は確実に売れる商品になっています。

利用者がこれまで培った経験を発揮してもらうため、作品を通し多くの方と輪をつないでいける支援や環境作りを、行っていきたいと思います。

心地よい機織りの音が活動室に響きます

機織り製品（ティッシュカバー）

万屋 ―でい・さくさべ―

万屋の設立は平成17年度、「働きたいけれど…働くってどんなことだろう？」そんな利用者の声から、皆で働くということを勉強する「ワーククラブ」が始まりでした。平成18年４月から１ヶ月の準備期間を経て「働くこと」を支援するでい･さくさべの９つ目のパートとして本格的に始動しました。５、６月は実習と称し、希望者（当時は既存の利用者）に対して“本当に働くことを目的に日々トレーニングをするか”を考えてもらう期間としました。最終的には「また働いてみよう」といった想いを強く持った６名でのスタートとなりました。

将来的に「働く」ことを想定し、でい･さくさべ館内の清掃、厨房での食器洗浄、調理、建築部材の組み立て、勉強会、求職活動（ハローワーク訪問や合同面接会への参加）などからプログラムの構成が成されました。これらを媒介に、挨拶、返事、作業態度など「基本的な就労習慣の習得」を目指し、日々のトレーニングを行いました。

館内のすみずみまで、しっかりと清掃です。

平成19年６月より２名、翌年２月から２名が新たに在籍し、計10名の所属となりました。プログラムでは弁当の受注を始め、地域へ向けた配達も行い、利用者にとっては「お客様がいる」といったより実践に近い環境の提供ができました。相手が見えることで、仕事に対する責任感が持て、職員以外の人とのコミュニケーション（挨拶、接客態度など）を学ぶことができました。これらのトレーニングを重ね、「就労に向けて実習をしてみようかな」といった気持ちの変化が見られるようになりました。

味も抜群！と好評をいただいている万屋弁当

平成20年度からは、千葉公共職業安定所、千葉障害者職業センター、千葉障害者就業支援キャリアセンターなど就労支援の関係機関との連携が色濃くなりました。「就労する前に実習をしてみたい、就労した後のフォローが必要」そんなニーズにも、これらの機関の方々のご協力を頂くことで、応えられるようになりました。

カシオペア　―でい・さくさべ―

現在のカシオペアは平成11年に始まったデイサービス事業に端を発します。デイサービス開始当初は、登録者も少なく利用者は通所更生のグループに入って活動をしていました。しかし平成12年には「デイパート」を設立。陶芸と結びおりを中心とし、様々な活動に取り組める環境を模索しました。その後デイパートは、「カシオペア」と名を変え、在宅障害者のカルチャーセンターとしての役割を果たすべく、ビーズ、キャンドル細工、七宝焼き、切り絵、ワープロなど多くの活動を取り入れていきました。

「おはようございます！」送迎車でのお迎え

平成15年４月に支援費制度が開始されてからは、定員を20名として新たなスタートを切りました。制度は変わりましたが、サービス内容に大きな変更はなく、事業開始当初からの日中活動と、送迎サービス、入浴サービスの３つのサービスを柱として事業を展開してきました。

平成18年10月の障害者自立支援法の本格施行を機に、デイサービス事業は廃止され、カシオペアは旧法通所更生のひとつのパートとして再出発をすることになりました。利用者はご希望を確認した上、これまでのカシオペアに残留されました。送迎サービスは暫定的に提供を続けましたが、入浴サービスは提供を中止しました。日中活動は、屋外での運動的な活動や、建築部材の組み立ての下請け活動、そしてレク的要素の強いクッキー作りなど、様々な試行を続けながら、その時々の利用者の状況に合わせて新たな活動を提供しました。

細かいビーズも設定具を用いて、わかりやすく

次々と変わっていく制度の中で、支援のポイントを絞りこめなかった時期もありましたが、幅広い年齢層と様々な特性を持った利用者で構成される活動パートとして、柔軟にその時々を過ごしてきました。

あ　ん　ず　―でい・さくさべ―

あんずは、より個別の対応が必要な方にも、興味や達成感を感じられるように、そしてゆとりある生活リズムの中から安定した日中活動を送ることが出来るようにと、開所から２ヶ月経った平成11年６月に立ち上がったグループです。

活動内容としては、歩行（ウォーキング）、缶つぶし、ポパイ（建築部材の組み立て）などを行なっていました。利用者に合わせた設定の工夫を行ない、コミュニケーションを密に取りながら、喜びややり甲斐を実感出来るように支援してきました。

健康管理のための歩行は、10年間続けており、歩くことや外の空気に触れる事で、基礎体力の維持向上や動的な発散を目的にしています。それだけではなく、数多くのボランティアの方々にも参加して頂いたり、地域の方からお声を掛けていただくなどの交流もありました。

ボランティアさんも一緒にウォーキング

リラクゼーションやリトミックなどでは、静かなゆとりある過ごしを提供しています。また、衣服の着脱や排泄リズムの安定など身辺処理の部分的な自立にも力を入れてきました。一つでも多くの「可能性」を探し、家庭生活における幅を広げていく支援も行なっています。

この10年間の中で、利用者の構成も大きく変わり、その中でそれぞれが興味を持つ活動も変化してきており、試行錯誤する時期もありました。様々な障害特性や健康状態の利用者にもより多くの喜びや達成感を実感してもらえるように支援内容を模索しています。現在は体力の維持を目的としたプログラム、音楽活動、プール、外部施設を利用した調理活動など、柔軟に刺激的なプログラムを試行しています。

外出先でのひとコマ

木の実 ―でい・さくさべ―

利用者の興味・関心に合わせた活動の提供や特に基礎訓練的な要素を目的として、平成16年度４月から新たなパート「木の実」を設立しました。パート名「木の実」の由来は、「一人一人の木の実が様々な経験、達成感を獲得しながら、やがて大きな樹に育っていってほしい」という想いが込められています。

満開の桜の木の下で

パート設立当初は、ビーズ通しや缶運びの活動からスタートしました。

また、高等部を卒業したばかりの若い女性メンバーという構成を生かし、女性らしさという視点で、身だしなみや嗜みを意識出来る支援を目指しました。サークル活動では「きれいなお姉さんは好きですか？」プロジェクトで身だしなみに必要な買い物へ行ったり、ちょっとした行動も女性らしさを意識した働きかけを行っています。

木の実も立ち上げから６年目を迎えました。課題に対して「座って活動する」事からスタートした木の実の活動も、現在は一人一人の活動の幅が広がり、集中して机に向かう姿が見られます。当時の姿を振り返ると、この６年間の成長は目覚ましく、今後も彼女たちの可能性は更に広がっていくという期待を強く感じます。

タイルモザイクの作品

ビーズ細工の作品

はばたき　―でい・さくさべ―

「はばたき」は、でい･さくさべ開設当初の平成11年からある、屋外活動を中心としたパートです。

缶プレス、建築部材の組み立てが作業活動の中心としています。これらの活動は、単純でわかりやすく、完成量が明確なため、「こんなにやった」と達成感を感じることができます。また、日々同じ作業を繰り返すことで、でい･さくさべでの過ごしに見通しがつきやすく、安心して作業ができるようになりました。

アルミ缶プレスの様子

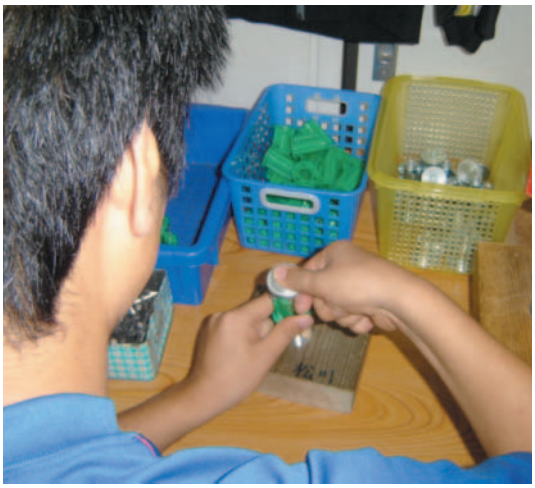
また缶プレス、建築部材の組み立てといった個々での活動だけでなく、みんなで出来る活動や人と関わる活動はないかと、畑作りがはじまりました。

畑作りは、体力を十分に発散し、そして作業自体も複雑でない、土を運搬する作業を中心に行いました。もちろん野菜を栽培し、収穫する楽しみもありました。

この畑作りを発展させ、椎茸栽培を視野に入れたトレーニングを始めました。特に原木の運搬は、季節に関係なく一年間を通じて行える活動であり、見通しがつきやすく、重たい原木も次々と運びます。

はばたきの利用者にとっては最適の活動です。

重たい原木も次々と運びます



建築部材の組み立て作業

日中一時支援事業　―でい・さくさべ―

この事業は、平成13年の千葉市レスパイト事業に端を発し、平成15年には支援費制度開始時に「短期入所事業」となり、平成18年には障害者自立支援法施行に伴い、現在の「日中一時支援事業（日中預かり型・放課後対策型）」となりました。

制度の流れの中で、様々な名称の下に行われてきた事業ではありますが、利用の方法としては、①でい・さくさべ利用者の夕方の過ごしの場、②在宅者の一時的な日中活動の場、③緊急時の対応。さらに児童にとっては、④進路選択をする社会経験の場、⑤学校の長期休み時の過ごしの場、⑥放課後の過ごしの場などを、ほぼ一貫して提供してきました。

特に児童とその家族を支援する活動として、平成14年より、土曜日活動「ちょこたん」を開始しました。最初は施設内で遊ぶことが中心でしたが、平成20年度からは動物公園に行ったり、調理活動をするなど活動の幅を広げてきました。

夏休みにはプールで遊びます

また、放課後の利用では、事業が始まった平成13年当時、施設と学校を結ぶ移動手段がありませんでした。しかし各学校に御協力を仰ぎ、本来ならば自宅までの利用となっているスクールバスの運行を、児童・生徒のニーズに応じて、でい･さくさべ至近のバス停で途中下車してもらい、職員がバス停までお迎えに行って放課後をでい･さくさべで過ごしてもらう方法が実現しました。今でこそ、「日中一時支援事業（放課後対策型）」により、学校までのお迎えが可能となりましたが、当時としては画期的なものでした。

サービス利用のための送迎は、高いニーズです

また学校の長期休暇時の過ごしの場としては、平成15年度の短期入所事業以降、毎年多くの利用希望があります（それまではデイサービス事業で受け入れ）。

地域の支援機関として、今後も各学校と連携し、児童・生徒及びそのご家族への支援を積極的に進めていきたいと思います。

ケアホーム　―でい・さくさべ―

共同生活介護事業所（ケアホーム）でい・さくさべは、平成13年４月１日、千葉市若葉区に生活ホームゲンゴロウとしてその産声を上げました。設置にあたっては、当時の千葉市内に知的障害者グループホームがまだ設置されていなかったこともあり、平成12年度にグループホーム設立準備委員会を立ち上げました。その中で、全国政令指定都市のグループホーム設置状況、生活の実態調査、物件探し等を行い、千葉市と協力しながらグループホームの設置に向けた準備を行ってきました。

そして、平成13年10月１日に千葉市で初めてのグループホームゲンゴロウが誕生しました。

みんなで準備して…、夕食です

グループホームは、親元を離れて、地域の中で仲間達と協力し合い、必要な支援を受けながら生活していく利用者の第二の我が家です。初めてのグループホーム生活では、ホームシックもありました、喧嘩もありました、失敗もたくさんありました。しかし、それ以上に今までできなかったことができた喜びを実感し、家族の本当のありがたみを知り、何より仲間達と一緒に毎日楽しい自由な生活を過ごすことができています。

その後、「あめんぼ」が立ち上がりました。大家さんのご都合で、３年目に転居という事態もありましたが、千葉市中央区で６年目を迎えています。平成20年１月には、家族の強いご意向を受けて千葉市稲毛区に「ホタル」を設置しました。今では、この３つの住居に13名の方々が毎日楽しい生活を過ごしています。

ケアホームホタルの開所式

グループホームゲンゴロウが設立されてから８年の時を経て、現在では千葉市内に30か所以上のグループホーム・ケアホームが設置されるようになりました。障害を持たれた方々が地域で当たり前のように、普通の日常生活を営む大切な制度の一つとしてこれからも益々増えていくと思います。当法人も８年間の実績を踏まえながら、たくさんの方々の地域生活を支えていければと考えています。

相談支援事業 ―でい・さくさべ―

当法人にて実施している相談支援事業は、平成14年10月に知的障害者生活支援事業の委託を受けたことから始まります。同事業は、地域で働いている知的障害を持つ方々の就労支援・生活支援を専任の生活支援ワーカーが訪問等により実施するものでした。当時は、でい・さくさべが発足してから３年半しか経過しておらず、就労している知的障害者への支援経験も少なかったこともあり、毎日の相談支援ひとつひとつのが、新しいことへの挑戦となっていました。

福祉サービス利用の支援、各種制度の利用支援、子育て支援、金銭管理支援、住環境整備支援、求職支援、職業定着支援と施設支援をしていたこれまでとは明らかに違ったニーズに応えていくこととなりました。これらの相談支援を行っていく過程で、行政の方々、教育機関の方々、医療機関の方々、司法機関の方々、企業の方々等、本当にたくさんの機関の皆様と連携することができ、お一人の相談者を支えていくためのネットワークが広がっていけたことが法人にとっても大きな財産となっていきました。

障害者自立支援法においても相談支援の位置づけはこれまで以上に高まってきています。当法人においても平成18年度より千葉市相談支援事業の委託を受け専任の相談支援専門２名、生活支援ワーカー１名の体制を作ることができました。そして、千葉市内他６カ所の相談支援事業所と連携しあいながら、知的障害・精神障害・身体障害・発達障害と障害の垣根を越えて幅広い相談支援を展開するまでになりました。また、同時にこれまで以上に多種多様な関係各機関との連携も強まってきています。

今後も多様化してくる相談支援のニーズに対応するため、平成21年度「千葉障害者生活支援センターふらる」という千葉市相談支援事業の窓口を設置しました。より専門性の高い相談支援、相談者の立場に立った相談支援、気軽に相談できる相談支援、相談者と相談支援専門員が対等で自然な関係が築ける相談支援が提供できるよう、今後も行政を始めとした各関係機関とのネットワークを大切に一人ひとりの相談ニーズに誠心誠意こたえていければと思います。

様々な相談をお受けしています

大空　―でい・まさご―

「大空」はでい・まさご開所当初の平成17年からあるグループの１つです。
当時は地域清掃、木工の活動を提供しました。特に地域清掃では「地域に根差した活動」「グループ意識の向上」「交通マナーの向上」を目指していました。その成果で、地域での認知度も上がり、挨拶をしてくれる方が増えました。グループ意識も確実に高まってきました。

ゴミをたくさん拾っています

木工では「鎌倉彫り」に特化した作品作りに力を入れ、技術向上や安全面での配慮を繰り返し伝えてきました。

平成20年度からは、活動の見直しを図り、所属するメンバーにとって最適な活動を検討しました。そのような時に、近隣の真砂第一中学校から使っていない畑のお話をいただきました。大空にとっても地域清掃に代わる動的な活動を検討していたので「園芸活動」に向けて準備を開始しました。２か月の準備期間を経て、同６月より、真砂第一中学校内の畑で園芸活動をスタートさせています。活動の狙いとして、動的発散はもちろんの事、収穫を通して活動への満足感や達成感を得る、学校や地域との交流を大切にしました。

その結果、地域清掃では得られなかった肉体的負荷が、心地良い疲労感につながり、生活リズムの安定に繋がっていました。また、地域との繋がりに関しても、中学生の体験学習受け入れや地域交流バザーに来ていただくなど、これまでになかった広がりを感じています。

鎌倉彫り（プレート作り）の様子です

大きくなった野菜を収穫します

ほ　か　ほ　か　―でい・まさご―

「ほかほか」は、でい・まさご開所の平成17年度より、調理活動を主体とするパートとしてスタートしました。

当初は、午前中はごはん・味噌汁の炊飯、外注した給食の「配膳活動」を行い、午後は食に関わることから衛生面の意識を持つことを目的とした清掃活動や、昼食時に提供するデザート作り、食材の買い物を行いました。

昼食の配膳。丁寧に並べていきます

その後、講師を招いて手打ちうどん打ちの講習を受け、本格的に「うどん打ち」が始まりました。この手打ちうどん作りは、午後の活動の主体となり、現在も行われています。

小麦粉に塩水を入れてこね、足で踏み、一晩ねかせてから麺棒で延ばして切るという、すべてが手作業で行われる「手打ちうどん」は、最初はなかなか上手くいきませんでしたが、５年の試行錯誤と経験を重ね、現在はとてもおいしい麺を作ることができるようになりました。給食やバザーで食べてもらい「おいしい」と言ってもらえることが、現在では利用者の励みになっています。

↑　うどん打ちの様子　↓

まつぼっくり　―でい・まさご―

適度な運動量の確保を必要とし、室内で軽作業も行いたいといったニーズから、でい･まさご開所後１カ月を経て、平成17年５月中旬から、でい・まさご４つ目のパートとして誕生しました。

ウォーキングの活動では、体力の向上、生活リズムをつけていくことや地域を歩行することで交通ルールを守ること・社会性を養うことを目的としました。近隣の公園まで途中で休憩を入れて、１時間30分の行程をゆっくりと往復しています。公園内でお茶を飲み、この間に歩行を希望する方、ボールなどを使って体を動かしたい方、それぞれに職員が付き添い時間を過ごします。

毎日行うウォーキング

また缶プレス、タイルモザイクづくり、ビーズ通し等の室内活動も提供しています。利用者の意欲・適性に合わせた活動種を取り入れ、製品化できることを目標において作品づくりを行っています。缶プレスの活動は室内作業ではあるものの、動的なプログラムとして取り入れました。ただ、室内で活動するにあたり、汚れた缶も使用することから、缶を洗うといった活動内容もその後に取り入れています。

室内での缶プレス

年を経る毎に、活動内容や生活リズムの安定が図れるようになり、今では地域との繋がりや、利用者間での協力体制についての目標を掲げられるようになりました。具体的には、地域清掃活動の導入や地域近隣での缶回収、利用者主導によるまつぼっくり会議を行うこと等です。缶の回収時には職員が裏方にまわり、挨拶を交わすこと、缶をもらうこと等、利用者が前面に立って取り組んでもらっています。まつぼっくり会議では、挨拶、司会、発表と役割を設け、個々が注目される場面を作り出しています。そうすることで、発表や話し合いといった雰囲気が、自ずと感じられることを期待しています。

外出先はみんなで決めます

めばえ　―でい・まさご―

「めばえ」は、室内活動を中心に、午前中は「結び織り」「糸巻き」「たばね」の活動を提供してきました。また、運動量の確保のため、ウォーキングを週に２回行っています。外に出る機会が増えたことで、始めは疲れが見られるメンバーもいましたが、少しずつ体力もつき、外に出て気持ちのリフレッシュをすることで、室内活動へ意欲的に取り組めるようになりました。

ウォーキング

20年度後期からは、地域清掃と園芸を取り入れ、運動量の確保だけでなく、動的発散、体力の向上を目的としてきました。園芸では、収穫した野菜を食べる機会もあり、自分たちが頑張って草取りをした結果を感じられる良い機会となりました。

結び織りに関しては、技術の向上に力を入れてきました。販売にも力を入れ、座布団サイズの結び織りを作成するだけでなく、大きいサイズや、クリスマスツリー等、様々な形の作品を提供できるよう努めてきました。日々の積み重ねで、個々の技術が向上し、作品の質も高まってきています。

「めばえ」は個々の作業が多く、周囲と協力して進める機会が少なくなりがちですが、「糸巻き」から「たばね」「結び織り」といった過程を、全て一人で最初から最後まで進めるのではなく、各工程をそれぞれの担当がこなすことにより、個々が作品を作る上で役割を持ち、皆で一つの作品を作り上げている意識を働きかけてきました。

今後はよりグループ意識を高め、仲間同士の繋がりを大切に出来るグループになっていただきたいと思います。

活動風景

平成19年度集合写真

日中一時支援事業　―でい・まさご―

でい･まさごを開所して間もなくから、この事業を必要としている声は多くありました。でい・まさごに通所されている方の親御様からは、「降所後も預かって欲しい」「迎えが遅れてしまう時は使いたい」等のご意見、特別支援学校に通うお子様がいる親御様からは「長期休みに預かってもらえないか」「放課後に預かってもらうにはどうすればよいか」等のお問い合わせから、この事業の必要性は十分に感じていました。

そして、でい・まさごも４年目に入り、通所環境が比較的安定してきたことから、職員を１名増員し、平成20年５月に日中一時支援事業（日中預かり型）が１日定員５名でスタートをしました。

利用を希望する方は益々増え、その中でも特に目立ったのが、近隣にお住まいの児童が多いというところです。少しずつでも、でい・まさごのサービスが浸透しているのを実感しています。

今後、特別支援学校高等部の生徒数が増えている事を考えると、日中一時支援事業を利用される方々が増えてくる事は予測されます。しかし、現時点でも、長期休みなど、キャパシティーの問題から100％ご要望にお応えできず、受ける日数を減らさざるを得ない状況にあります。その問題をいかなる方法で解決し、利用を希望される方にどうご満足いただけるかを近々の課題として検討します。

テレビをみながら絵画やパズル

軽く体を動かしたり、好きなことをして過ごします

トイライブラリー事業 ―法人受託―

「千葉市トイライブラリー事業」は、平成17年より千葉市から委託を受け実施している事業です。

主に就学前の児童を対象にしており、心身障害児がおもちゃを通じて遊ぶことにより機能回復及び能力発達を促進することを目的としています。活動内容は①おもちゃの貸出②遊び場の提供③子ども向けのイベント④保護者へ勉強会の企画⑤ボランティアの育成の５点です。

始めてみると、おもちゃの貸出や遊びに来ることが目的ではなく、親同士のつながりや情報収集の場であることがうかがえました。

この様子を受けて、まず始めたのが、保護者向けの勉強会の企画でした。学識経験者や児童施設の施設長、また、学校の先生や養護教育センターの方をお招きして、「子育てに関する座談会」「就学相談会」を開催しました。また実体験として保護者の立場としての「子育て日記」や、「兄弟から見た障害」などの企画も実施しました。

様々な思いが語られる座談会

子ども向けのイベントとしては、毎年クリスマス会を開催し、人形劇や大学のボランティアサークルによる楽しい歌やクリスマスリース作りを行っています。もちろんサンタさんからのプレゼントもあり、ぬいぐるみや文房具、パウンドケーキなど、いろんなプレゼントに子どもも親も大喜びです。

子どもたちも、サンタさんに大喜び

法人として未就学児との接点のある数少ない場として、このトイライブラリーを通じて幼少期から成人に至るまでのつながりを意識しながら、今後も夢いっぱいのトイライブラリーでありたいと思います。

さまざまな活動・行事

でい・さくさべ ―さまざまな活動・行事―

自治会活動

10年間の時間をかけて、少しずつ形を変えながら平成20年度には、合計９つの自治会委員会と、執行部であるさんふらわあ会が系統だった組織として存在しています。

施設開所初年度より、栄養士を中心とした給食委員会を毎月開催。各活動パートの代表者が食事に関する目標を決めて、話し合う機会を設けました。これが後のはなまる委員会となります。

また同じく初年度より、朝・昼の館内放送を行う、放送クラブを発足。これも後の放送委員会に。

さらに平成12年度（２年目）からは、さくさべシアター委員会を開始し、シアターの上映内容などを決める話合いを持ちました。また同年度には、宿泊旅行を実施することから旅行委員会を立ち上げ、旅行の内容について検討してきました。

旅行委員会のひとコマ

開所３年目、平成13年度より、施設全体としての利用者自治会の発足に着手しました。この年は、自治会の執行部となる核を作り上げ、翌年の全施設的な組織作りの基礎となることを目指しました。全利用者に対してまず中心となった利用者に投げかけたことは、「でい・さくさべを今よりもっと過ごしやすい場所にしよう」ということでした。この投げかけに賛同した利用者らが、自治会の核となる集まりを“さんふらわあ会”と名付け、本格的な自治会設立のための活動をしてきました。

そして開所４年目、平成14年度には、ほぼ現在の形の自治会組織が出来上がり、生活環境委員会（後のクリーン委員会）、図書委員会（後にビデオ委員会が分化）、販売スタッフ委員会、旅行委員会、はなまる委員会、シアター委員会（後のおたのしみ委員会）、余暇活動委員会（後のおたのしみ委員会）、放送委員会で利用者自治会活動がスタートしました。

立会演説会の真剣な表情

執行部は任意の集まりでしたが、開所５年目、平成15年８月７日には第１回の利用者自治会選挙を行い、自治会会長以下の役職が決定。２年の任期を設定し、平成17、19年にも同様の選挙を行いました。

父親懇親会

父親懇親会は、普段は仕事で多忙を極め、施設や職員との関わりがなかなか持てずにいた父親を対象に、施設開所２年目より父親懇親会を企画し、最新の福祉情勢や施設の展望等を共有する機会になっています。

グループホームについての勉強会や、日中活動に関する職員のプレゼンテーションに対してご意見を頂戴したり、父親として我が子への関わりについて座談会形式で語り合ったり、毎年テーマを変えながら実施してきました。

このような機会を通じて、父親同士の結束も強まり、地域交流イベント「ハロー！でい・さく」では、“おやじの店”として焼きそばの模擬店を出店し、力強い男の料理は話題となっています。さらに「年末スペシャル」では、“おやじバンド”として見事な歌声を披露してくれています。

父親と職員たちが楽しく、時には真剣に語ります

おやじのパワーはいつの時代もパワフルで、これからも変わることはないでしょう。

でい・さくさべ ―さまざまな活動・行事―

さくさべシアター

余暇的な楽しみを提供する機会として、利用者全員でビデオ上映を楽しむ「さくさべシアター」を初年度より行ってきました。

上映作品は、ドラえもん、ディズニーやジブリなどのアニメ、映画作品や音楽ビデオなどがあり、利用者の趣味や趣向を考えて職員が用意をしていました。しかし利用者の意向をより反映しようという考えから利用者の集まりとして「さくさべシアター委員会」が立ち上がり、上映作品だけではなく、休憩の間に提供するおやつの内容などについても話し合いをするようになりました。

スポーツ大会

さくさべシアターではビデオ上映だけではなく、人形劇団の発表や音楽会、マジックショーなど外部の方をお招きして舞台を楽しむ機会もありました。

スイカ割り

腹話術

さくさべシアター委員会は、利用者自治会組織の中では「おたのしみ委員会」と名称を変更し、ビデオ上映の他、スポーツ大会やスイカ割り、演奏会やカラオケ大会などをさくさべシアターの企画に加えて、利用者のみなさんの余暇的な楽しみを実現できる時間となるよう頑張っています。

サークル活動

今でこそヘルパーさんとの外出（移動支援当等）はメジャーになりましたが、施設開所当初はそもそもそのような制度自体が存在しませんでした。日中活動以外に、社会経験の機会を提供することも、でい・さくさべに期待された大きな役割でした。

そこで、普段の日中活動とは違った余暇的な楽しみを提供する機会として、各活動パートごとに毎月１回のサークル活動ができました。

サッポロビール工場

仲間同士の休日の過ごし方を広げることや、社会的マナーの獲得と余暇の充実を意図した外出行事。“家でも出来る”内容で行われる調理活動。社会資源の活用を目指した図書館利用…等、ただいつもと違った活動を楽しむだけでなく、利用者の生活に返っていくことを意図してサークル活動は行われています。

毎月の活動の内容は、利用者の意向を反映し企画されます。毎月のサークル活動を楽しみに待っている利用者の方々の様子を見ると、今でもとても強い期待を持たれているのだなと感じます。

千葉市動物公園

こてはし温水プール

でい・さくさべ ―さまざまな活動・行事―

旅　行

でい・さくさべでは、開所２年目より旅行行事を企画してきました。普段、日中の過ごしを共にする仲間や職員たちと一緒の旅行は、利用者の皆さんにとっても、施設にとっても一大イベントです。

観光バスを貸し切っての一泊旅行から始まった旅行ですが、利用者自治会の旅行委員会を中心として、様々な意見を反映し希望のコースに応じて、二泊三日のバス旅行、新幹線や飛行機による遠方への旅行、遂には海外旅行も実現しました。

普段はなかなか泊まりがけで出かける機会がなかったり、仲間とともに楽しめることで利用者の旅行に対する期待は、今もとても大きいものがあります。

沖縄にて

仲間との楽しいひととき

海外旅行も実現しました（グアム）

クラブ活動

でい・さくさべ開所と同時に、通常の日中活動以外の余暇的なすごしの時間として、利用者それぞれの興味に応じて楽しんでもらうことを目的に取り組んでいる活動です。

音楽クラブ

ソフトボールクラブ

開所当時の平成11年度は「音楽」「美術」「華道」「書道」「ソフトボール」「体操」の６グループでした。

その後、利用者の幅広い興味に応じて、次々と新しいクラブが誕生しました。今では、「音楽」「美術（美術クラブと書道クラブが合併）」「ソフトボール」「体操」「ワープロ」「青空（ウォーキングを楽しむクラブ）」「料理」「スポーツクラブ」の８つのクラブで活動をしています。

スポーツクラブ

美術クラブ

ワープロクラブ

でい・さくさべ ―さまざまな活動・行事―

ハロー！でい・さく

毎年たくさんの方が来られます

初年度には、利用者・保護者・職員合同により、バーベキュー大会「100人だよ、全員集合」を行い、でい・さくさべ関係者の親睦を深めました。

この行事が出発点となり、でい・さくさべを地域の方々により深く理解してもらうことを目的として、利用者・保護者・施設の三者共催による地域交流イベント「ハロー！でい・さく」が誕生しました。

利用者作品販売、焼きそばや豚汁などの模擬店を出店し、地域の方をお招きして開催していましたが、年を重ねるにつれて、地域のお店や市内の障害者支援施設にも協力してもらい、様々なお店を出していただけるようになりました。また、地域のサークル等に出演をお願いし、様々な出し物を披露していただいています。

企業からもご協力いただいています

利用者自身も模擬店を出店したり、ダンスクラブや音楽クラブが出し物を披露したりと、地域の方と関わる機会が多くなり、利用者にとっても喜びや自信につながる機会になっています。

近隣にある千葉東高校の演奏です

「おやじの店」お父さん方もお店を出します！

でい・まさご ―さまざまな活動・行事―

個別相談（座談会）

「苦情解決とサービス自己評価」という視点から、利用者にとってより良い生活空間を創る方法のひとつとして、月に一度千葉大学教授の北島善夫先生をお招きして、利用者の方と懇談する機会を設けています。

この取り組みは、でい・まさご開設当初からのもので、当初は複数の利用者と北島先生との座談会形式でしたが、ひとりひとりのお話を丁寧に聞く機会を作ってみてはどうか？という、北島先生からのご提案により、徐々に個別相談の機会となり、現在に至っています。

先生と個別に相談

北島先生は、でい・まさごでの事だけでなく、御家庭での悩みごとも聞いてくださるので、普段、なかなか職員に気持ちを伝えられない方でも、スラスラと言葉が出て、気持ちを伝える事が出来ます。一緒に会話を楽しんでくれる北島先生だからこそ、利用者の皆さんもこの月に一度の北島先生との個別相談を、とても楽しみにしています。

自治会活動

でい・まさごにおける自治会活動は、開所１年目に初めての宿泊旅行実施に向け、利用者の意見を取り入れようと、旅行委員会が立ち上がったことからスタートしました。

その後、施設内の図書を充実させてほしいという利用者の意見から「図書委員会」が、自分たちの施設を自分達できれいにしようという意見から「クリーンまさご委員会」が、でい・まさごでの活動を広報誌として発表したいという意見から「広報委員会」が発足しました。

クリーンまさご委員会

開所２年目からは、施設全体としての自治会活動を立ち上げ、すべての利用者がそれぞれの委員会に参加して活動をしてきました。

開所３年目には、各委員会の委員長が集まる役員会が組織され、翌年には「リーダー会」と名前を変えて、自分達の施設を自分達で盛り上げていこうという気風が毎年高まっています。

リーダー会の様子

販売委員会

このリーダー会を中心として、利用者全員が一丸となり、七夕、夏まつり、バザー、クリスマス、もちつき大会、節分、花見など、様々な行事を実施しています。

夏まつり

クリスマス会

もちつき大会

でい・まさご ―さまざまな活動・行事―

クラブ活動

毎週金曜日の午後に、利用者の趣味的な活動を目的として、クラブ活動を行っています。

音楽クラブ、ダンスクラブ、美術クラブ、ウォーキングクラブの他、でい・さくさべと合同で行っている体操クラブ、ソフトボールクラブがあります。

利用者にとっては、１週間の疲れを吹き飛ばす、楽しい時間となっています。

（音楽）皆で合唱を行ったり、利用者１人ひとりが曲を選びカラオケを行っています。さわやか芸能発表会にも出させていただいています。

（ダンス）その時その時の流行りのJ-POPや、アニメソングのPVやTV番組に合わせて踊りを踊っています。利用者のリクエストに応え曲を変更する事もあります。

（美術）好きな絵を描いたり、貼り絵、ぬり絵、折り紙、ビーズを行っています。アートフレンズ展や書道展にも出展しています。

（ウォーキング）でい・まさご近辺の公園を目的地として、ウォーキングを行っています。

（体操）トランポリン、バランスボール、バスケットボールを中心に行っています。

（ソフトボール）さくさべと合同で、守備練習やバッティングなどを、本格的に行っています。ゆうあいピックソフトボール大会では好成績を収め、今後も期待大のチームです。

音楽クラブ

美術クラブ

サークル活動

カラオケ

ボウリング

上野動物園

普段の日中活動とは違った余暇的な楽しみを提供する機会として、各活動パートごとに毎月１回のサークル活動があります。

外出プログラムでは、水族館や動物園、カラオケやボウリング、東京タワーなど、利用者自身に行き先を決定してもらい、サークル活動を企画しています。外出の楽しみに加えて、利用者が地域・社会と関わる機会を持ち、交通機関を利用する練習や、社会のルールやマナーを習得することも大きな目的です。

また施設館内で行うプログラムでは、調理活動などがあり、自分達で昼食やお菓子を作る楽しみとともに、生活能力を習得することができるような企画もあります。

でい・まさご ―さまざまな活動・行事―

稲毛の浜ボランティア清掃

「社会貢献を通じて、利用者がやりがいをもち新たな活動意欲に繋がる」「地域に住む方々への還元と、でい・まさごの活動を理解して頂く」という目的の下に始まった活動です。
この活動は、「ボランティア活動支援事業」として、千葉市手をつなぐ育成会が千葉市から受託して行っている事業です。

でい・まさごよりほど近い、稲毛の浜および稲毛海浜公園内を、ボランティアの方々と一緒にゴミ拾いの清掃活動を行っています。

利用者の方にとっては、ボランティアさんとの交流の機会にもなっており、毎回この活動を楽しみにされています。

小さなゴミもひとつひとつ拾います

でい・まさご祭り（地域交流バザー）

開所初年度は、でい・さくさべとの合同開催でしたが、翌年からは“でい・まさご祭り”として単独で開催し、毎年350名を超える来場者があります。

多くのお客様をお迎えするに当たって、でい・まさごの施設条件では手狭な感がありますが、「より多くの地域の方々にこの施設を知ってもらいたい」「地域に根付いた施設を目指したい」という思いから、施設内での開催を継続しています。

この行事は、施設とまさご会（保護者会）による共催で、企画段階から検討を重ねることで、両者の一体感をより強める絶好の機会にもなっています。

ほかほかのうどんは、いつも完売

調理活動パート“ほかほか”による手作りうどんをメインに、軽食・喫茶の飲食物の出店や、利用者の作品展示即売、またイベントとして、ダンス・音楽クラブの発表、保護者の方や外部からお招きしているバンド等の生演奏などで毎年盛り上がっています。

音楽・ダンスクラブの発表

利用者の作品を販売

でい・まさご ―さまざまな活動・行事―

土曜日活動

休日の余暇支援としてスタートした事業です。
昼食作りやお菓子作りなどの調理や、カラオケ・ボウリング等の外出のプログロムを不定期ではありますが、年に４回程企画しています。また、保護者の方も一緒に参加出来る、稲毛の浜ボランティア清掃＆稲毛海浜公園内でのバーベキュープログラムもあります。

みんなで鍋パーティー

ゴミ拾いを頑張った後のＢＢＱは格別!!

普段は一緒に活動することの少ない他パートのメンバーとも、一緒に調理をしたり外出することができ、皆さん、とても楽しみにしてくれている取り組みです。

旅　　行

平成18年　熱海温泉

平成19年　鬼怒川温泉

旅行委員会が中心となって、利用者自身が準備・企画を行い、開所1年目より毎年一泊二日の宿泊旅行を実施しています。各パートから代表者を選出し、昼休憩の時間を利用し活動を行いました。準備の段階では、旅行先を検討するためのアンケート調査を全利用者に実施し、企画をまとめてポスターを作成したりしています。旅行の準備や企画は、旅行委員会のメンバーが行い、旅行当日の宴会では、旅行委員会のメンバーが司会を務め、毎年大いに盛り上がっています。旅行後も積極的に集まりを行い、次回の旅行に向けて活動を進めています。

２回目以降の旅行の際も、利用者による準備・企画を継続しました。回を重ねるにつれ、宿泊旅行へのイメージができるメンバーが増えてきました。旅行委員会では、場所決めでは旅行地を写真や本を利用して、アンケートを作成し、自分達の力で決められる様に設定しました。旅行に向けて、メンバーひとりずつに役割を持ち、司会の練習等も繰り返し行っています。その結果、旅行への意識だけでなく、旅行委員会のメンバーであるという意識も強くなっています。

平成20年　河口湖温泉

法　人　共　通 ―さまざまな活動・行事―

スポーツ行事

当法人の利用者が参加してきたスポーツ行事には、千葉市ゆうあいピック、千葉市ゆうあいピックソフトボール競技（旧青年学級対抗ソフトボール大会）、千葉県ゆうあいピックソフトボール選手権大会、千葉県フライングディスク大会、千葉市ゆうあいピックマラソン・駅伝大会があります。

これらスポーツ行事に参加し、好成績を残すことを目標としたいわゆるチャンピオンスポーツとしての取り組みよりも、どちらかというとレクリエーション的側面の“楽しみ”を大事にしたいと考えてきました。このため、各大会に対して施設で参加者を選抜するような方法は取らず、利用者全員に参加希望を伺い、希望者は全員がエントリーできるようにしています（クラブ単位での出場のソフトボール大会は除く）。

ここ数年は、平成22年（西暦2010年）に地元千葉で行われる千葉国体、そして全国障害者スポーツ大会を控えて、県及び千葉市においても障害者スポーツへの関心は高まっています。

好成績を残しているソフトボールクラブ

寒空の下、マラソン・駅伝大会

さわやか芸能発表会

千葉県知的障害者福祉協会に属する、スポーツ文化委員会が運営する文化活動で、「文化活動を通して表現する喜びを持ち、その活動の中での自己実現の可能性を共に追求し、理解を広げ施設を超えて交流を深める」事を目的としたイベントです。

毎年12月初めに千葉県文化会館大ホールを会場に行われます。発表には舞台発表と作品展示があり、舞台発表では千葉県内各地より、知的障害者支援施設がそれぞれに演劇、合奏、踊りなどを披露します。

でい・さくさべは初年度の平成11年度に音楽クラブが初舞台を踏み、『さくさべオリジナルメドレー』を発表しました。

その後も平成15年（でい・さくさべ）、18年（でい・さくさべ、でい・まさご）、20年（でい・さくさべ）と発表を行いました。舞台発表が決まると、音楽クラブやダンスクラブの活動に大きな目標ができ、毎週の活動にも熱が入ります。

晴れの舞台発表　大盛り上がりです！

法　人　共　通 ―さまざまな活動・行事―

アートフレンズ展

この展覧会は、幕張メッセ周辺を拠点に活動している幕張ローターリークラブが、社会奉仕事業の一環として、平成12年より「何かしらの障害を持ちながらアートする人たち」をテーマとして、毎年千葉市美術館において開催している美術展覧会です。

でい・さくさべは、平成14年５月28日～６月２日で行われた、第３回より参加し、以降毎年参加しています（でい・まさごは７回より参加）。

日中活動の中で製作された陶芸作品、クラブ活動（美術）からの絵画の出展から、染色、織物、オブジェ等、出展作品も年々バラエティに富んできました。

基本的にはこの展覧会に限定した目標を設定して作品制作に向かうのではなく、各々の日中活動の成果を発表するひとつの場として考えていました。しかしながら、この展覧会が毎年行われる恒例行事として利用者にも認識し始められたころから、“アートフレンズ展への出展を目指して作品を作る”という日中活動の目標を立てる方も出始めてきました。

利用者にとっては、自分の作品が立派な美術館で展示され、県内外の多くのお客さまにご覧になっていただける。そして自分の普段の取り組みが大々的に評価されることを、次の作品制作の意欲へとつなげられる。単にアートという領域にとどまらない、生活をしていく上での大変貴重な経験にもなっているのだと感じます。

作品を見るまなざしも真剣そのもの

展覧会自体への関わりも、第８回からは当法人職員が実行委員会の外部委員として参加させていただいています。福祉の領域に限らず、様々な方との関わりを通じて地域で利用者を支援できる、そんな関係作りの場にもなっています。

販　　売

日中活動の成果である製品が販売され、利用者が感じる「自分の作品が売れてうれしい」という思いはとても大きいものです。また自分の製品が売れることが嬉しくて、活動へのやりがいや次の製品を作る意欲に繋がっています。

販売の機会は年に何度かあり、稲毛区主催の稲毛区民祭り、他施設のバザーやゆりの木商店街主催のゆりの木祭り、千葉県知的障害者主催の手をつなぐ作品展など、地域の販売会にお声かけをいただいて、さくさべ・まさご共に積極的に参加しています。

自分たちで作ったものを販売します

うどん、パウンドケーキ、陶器、織物製品、木工製品、ビーズ製品など、日々の日中活動の中で利用者自身が技術を磨き、その結果としてより実用的な製品・販売できる製品を作れるようになってきました。

さらに販売の機会は、利用者の方々と地域の人とが関わる重要な機会であったり、法人施設を地域にアピールする良い機会にもなっています。

法　人　共　通 ―さまざまな活動・行事―

年末スペシャル

年末スペシャルといえば職員のバンド演奏

おかまバーも大好評です

年末スペシャルは一年に一度職員が利用者・保護者をもてなし、存分に楽しんでいただく機会として、施設開所１年目より実施しています。

職員によるバンドやダンス、そして手作りの凝った台本による寸劇と、様々な企画をして利用者・保護者の方々に楽しんでいただけるよう、取り組んできました。

次第に利用者から年末スペシャルに対する要望も出始め、利用者自身も参加して楽しみたいという希望から、ファッションショーや日中活動ごとの出し物も披露されました。さらにダンスパーティーを希望する声から、プロのバンドをお呼びして、生演奏で全員でダンスを楽しんだこともあります。そして、やはり楽しみなのが、食事の時間です。食事を楽しんでいただく為に、品を変え、部屋を改装して提供しました。色鮮やかなオードブルやお寿司、職員が手作りする「ラーメン屋」の開店、食事を優雅に楽しんでいただく為の琴やバイオリンのハーモニイ・・・。お酒も用意され、おいしいものを楽しく召し上がった方々の素敵な笑顔が印象的です。

平成17年からは、でい・さくさべ、でい・まさご合同での開催となり、平成20年は295人が一堂に会して、一日を楽しんでいます。

食事の時間も年末スペシャルのお楽しみ

メイド喫茶もありました

全員集合!!

それぞれからの声

保護者さんからの声

“でい・さくさべ”に想う

でい・さくさべ保護者　小林英雄

法人育成会が設立して10年が過ぎました。10周年記、お目出度うございます。

親の会の育成会が、法人手をつなぐ育成会を立ち上げ、通所更生施設が出来たことは大変喜ばしいことでしょう。育成会々員はもとより、関係者、行政の手厚い援助により、又地域の理解のある協力等々、大勢の方々に支えられて、作草部の地に誕生しました。

私共親子は、でい・さくさべ開所初年度より通所させて戴いて無事に過ごし、子供はもとより、親も勉強して、よりよい施設造りに協力してきたつもりです（充分な協力が出来なかったかもしれませんが）。

設立当時の若い職員の熱意ある行動、利用者に対しての接し方等々、親として頭の下がる思いでした。又親には出来ないことなどは、職員の支援により落ちついた生活を見ることが出来、感謝する思いです。毎日施設に通うのが楽しみの様子が、親にとって何よりのしあわせに感じるひとときです。

障害者自立支援法が施行され、福祉の方向性、考え方が目まぐるしく変化している現状を考える時、親として、どのような考え方を持ち、行動しなくてはと…頭が痛い思いです。

これからも色々と御迷惑、御心配をかけると思いますが、よろしく御指導のほど、お願い申し上げます。親子共々頑張っていきたいと思います。

これからも５年先、10年先と、“でい・さくさべ”が発展していくことを心から願っております。

法人でい・さくさべ10周年と共に

でい・さくさべ保護者　小林京子

法人設立10周年おめでとうございます。

10年ひと昔といいますが、私にとっても、息子にとっても、でい・さくさべと共に歩んだ10年間は生涯のうちで波乱万丈な日々でした。

10年前、私も息子も、心身共に疲れきっている時、ワラをも掴む思いで、でい・さくさべにお世話になったのです。その当時いろいろと課題を抱えての通所でしたので、当初から大変でした。ちょっと目を離すとどこかに行ってしまい帰ることができなくなり、保護されたところから連絡を受け、迎えに行くことも度々。モノレールに何時間も乗りっぱなしで、見つけた時は夜遅くということも度々。そんな時いつも職員の皆様が、あっちこっちと散らばって捜してくださったり、警察に保護された時には、警察まで迎えに行ってくださったりで…。でも本人は、さくさべ大好きで、高熱が出た時でも勝手にさくさべに行ってしまうこともありました。書ききれない程ご面倒ご迷惑ばかりの数年でしたが、さくさべ職員は愚痴ひとつ言わず、怒りもせず、見離すこともせず、その都度息子にきめ細かい指導をしてくださり、そのお蔭で段々と落ち着いてきました。

そんな折、市内に入所施設ができ、親亡きあとは入所しかないと考え、思い切って移ったのですが、３ヶ月でさくさべに出戻りました。そして、今が親離れ、子離れのステップを踏む時期じゃないかと強く感じ、紆余曲折がありながらも、ケアホーム「ホタル」の開所と共に入居することができました。現在息子は週末に実家に戻り、ひと晩親と過ごし、あくる日

保護者さんからの声

は早々とケアホーム「ホタル」に帰っていきます。

生活面（ケアホーム中心）、働く（でい･さくさべでの作業）、余暇（ヘルパーさんと外出を週１回）と、とても充実した日々をでい･さくさべ職員の方々のより良い指導の下に送っています。

これからの人生も職員の皆様のきめ細かい指導、必要な支援の下、楽しい日々を送ってくれることと信じています。我が息子のように大勢の障害者の人達の良き施設として益々のご発展をお祈り致しております。

苦節10年 されど10年 －福祉社会の夜明けに共に立とう！

でい・さくさべ保護者　川崎冨士雄

私の“支え合う社会と自立への夢”

10年前にこの作草部の地に幾多の難関、苦労を経て各方面の理解を得てスタートした、社会の合作とも云ってよいと思います。その歴史を目の当たりにするのが立派な施設を囲む樹木の成長に現れているように思う。今も四季を通して新しい葉をつけ、花々を咲かせて、成長を続けています。

この地に根を張って育っている樹木や「でい・さくさべ」も、10年という年輪を刻むと周囲の見通しや空気が淀んできます。この避けがたい老化を私たちの世代で防ぎ、遅らせられないか、またその手段はないか、自問自答する最近です。

行政も刻一刻と変化の兆しが見えてきたこの期に、障害者や高齢化する親が未来志向で新しい夢を描き、その実現に向け行動を起こす時だと思う。私たち親の会の構成員も要介護の世界が刻々と迫ってきている。

この社会に障害者が一人生活をしなければならなくなったら、不安のあまりストレス過重になり堪え難い日常になることは否定できないでしょうね。

この10年を建設の10年とするなら、これからの10年を繁栄、自立の10年にしようではないですか。

夢は十人十色、様々に違います。各々の夢にはそれ程の違いがあるでしょうか。

この素晴らしい環境を作り、育ててくれた職員・利用者はもとより、役所、近隣社会の支え合う気持ちを大切に当事者一員として、親の会がネバーギブアップの精神で力を合わせ行こうではありませんか。一般社会からも理解される仕組みを皆の思いで創りましょう。

教育・医療・就労の場・住居等を充実させて、国からの福祉支援が受け易い地域を目指すのが夢であり、幼児→高齢期（老人ホーム入り）まで一貫した地域を創って行くことの実現に向けて、一日も、一歩でも早く立ち上げたい。小さな施設、グループホームが纏まれば大きな力が発揮できるのではないでしょうか。

親の会として多くの意見を出して、その中で良いと思う意見を基に、サークルを作って、具体的な活動をしたい。直ぐには叶わないまでも、一歩一歩目指すものに近づければ良いと思います。ローマは一日にしてならずです。日進月歩、ことネバーギブアップの必要性を痛切に感じているのが現在の心境です。

今回は自分の思いをメモしただけです。10周年は通過点であり、これからのでい・さくさべを職員だけに頼らず、当事者の私達親の会が話し合い、意見を交わす場を持って結束していくことを願い、またその先の為には非力ながら協力する意志があります。

保護者さんからの声

10周年記念に寄せて

でい・さくさべ保護者　下村恵保

10周年誠におめでとうございます。同時に法人設立の母体となった「千葉市手をつなぐ育成会」の設立と、今では私どもの生活に欠かせない「でい・さくさべ」の建設に奔走された先人の方々に深い敬意と感謝を申し上げます。

障害者施策はまだまだ初期の段階なのでしょう。特に知的障害者に関しては全国的にも実態把握すら十分に出来ていない気がします。それだけにゼロからスタートした育成会の設立と施設建設は大変だったと思います。加えて「でい・さくさべ」の施設長はじめ職員の皆さんやボランティアのみなさんの献身的な対応にも頭が下がります。

過日、日本ダウン症協会の会報にダウン症児を持つ松野明美さん（元マラソン選手）の記事が載っていました。デイサービス施設を通じて逞しく成長する息子に沢山のことを教えられているという記事でした。私も同感です。障害を持ちながらも不満を言わず元気に通所し、帰宅後はその日の出来事を話してくれる。ソフトボール大会、ゆうあいピック、さわやか芸能発表会、アートフレンズ展などの諸行事。そして毎月のサークル活動や誕生会、毎日の給食やパン作り、陶芸、手芸、美術、園芸。時には委員会や友達やボランティアさんのこと等々。そんな中、時には同情したりすると「お父さん　いいよいいよ」と言って慰められる。親子の心情が通うひと時です。

現在、支援を受けられていない多くの在宅の方々にも一日も早く同じ環境が訪れることを願わずにはいられません。

この機会に小さな提案を一つ。最近「でい・さくさべ」の玄関ホール左手奥に値札の付いた利用者の作品が並べられています。私の家でも花瓶などを買い、季節の枝物を入れて楽しんでいます。こうした日用品はどの家でも使うものです。手芸、園芸、陶芸作品などもっとPRしたらどうでしょう。自分の作ったものが何時でも買ってもらえる。作品を作る利用者の皆さんの嬉しそう顔が見えるようです。

「でい・さくさべ」つれづれ

でい・さくさべ保護者　藤本日出夫

「10年一昔？」

「毅、そんなところでオシッコしちゃ駄目」、でい・さくさべ建設用地がようやく決まり、皆で「石ひろい」をしていた時の母親の声。それから10何年「毅も37歳になりました」。

その頃お世話になっていた施設の記録に書かれている「時間・衣服等にこだわる・歯磨き、食事等、生活面が悪い」等、「三つ子の魂百まで」相変わらず続いているのに苦笑いです。

「でい・さくさべ　さくさべ会」は今年で10周年。生みの苦しみと手探りの子育ての中、福祉制度が色々と変わり、ご苦労された10年間だったと思います。

通所もおかげで６年目にはいりました。「朝早く行くと職員に迷惑かけるから、もっと遅く行けば」と言っても、なんか楽しい事があるらしく７時半前には元気に家を出て行きます。

「ひょんなことからさくさべ会会長に」

「サンライズのさくさべ会役員はうちが順番よ」と言われ、「ああそうかい」と「中味をあまり知らないまま」新役員に。長が付くトップには、縁がなかったのですが、仕事も終わり

保護者さんからの声

かけ、昼間に時間が取れるので「平成18年度会長」をお引き受けしました。色々な事がありましたが、皆さんに支えられ、なんとか職務をこなす事ができ感謝しています。

又、出向く事が多くなり、色々と見えてきました。なかでも「個々に違う利用者への若い職員の真摯な取り組み」に、「親の感謝が今一歩かな」と感じるのは、私だけでしょうか。

「20年・50年後」

政治の世界も政権交代し、福祉制度も見直されますが、「利用者・施設職員・親が使いやすい制度であれば良いな」と思っています。又、利用者は判断能力が乏しく、親も高齢化する中で、「本人に一番良い方法を考える」しかありません。そのため、職員の待遇向上・さくさべ会のあり方等、課題は多いですが、「でい・さくさべは知的障害者援護の中核」として、「相談・サービス体制を充実」して頂き、「色々なサービスが選択」できれば有難いと思います。

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会の　設立10周年に思うこと

でい・さくさべ保護者　石井　直

法人10周年にあたり、利用者の親としてこの10年を振り返ってみました。

息子は４歳で大宮学園に入園してから32年間、知的障害者として学校関係者、障害者施設の関係者、また社会の皆様方からご支援を頂いて参りました。そして、でい・さくさべ開所と同時に利用者となり現在まで10年間通所させて頂いております。

この間、私は地方公務員として仕事をしてまいりましたが、残念なことに直接福祉関係の仕事をしたことはなく、また、趣味に夢中で息子のことは妻任せで学校行事をはじめ息子の行事に参加したことはほとんどありませんでした。妻は息子の行事には熱心に参加しており、したがって友達のことにも詳しく、さらには友達の兄妹やご家族のことなどもよく知っています。

その後私も定年退職をし、福祉関係の団体の事務局の仕事を３年ほど致しましたが、やがて毎日が日曜日となりました。平成19年の４月から１年間、でい・さくさべ利用者の保護者の会、「さくさべ会」の役員として会員の皆様と一緒になって利用者の福祉向上と施設の充実、発展をはかるため施設の職員のご指導を頂き、他の役員とともに一生懸命に働きました。

さて、今後の心配をしてみたいと思います。政局の変動と政策の変化、それに伴う高齢者、障害者など弱者への影響です。本年８月30日に衆議院選挙が行われました。結果は民主党が300議席を越える勝利となりました。民主党のマニュフェストにうたわれた子供手当の支給、公立高校の授業料の無償化など子育て支援を中心とした政策が充実されることになるのでしょうか、所得税法の改正により配偶者控除、扶養控除の廃止などにより、高齢者にも増税となるのでしょうか。いずれにしても、将来的には消費税の増税に向かうのでしょうが、我が家のように高齢者の年金生活と、その生活に支えられている障害者の生活はどうなるのでしょうか。いずれにせよ、社会的弱者にも将来の希望が持てる方向に進む事を望んでいます。

法人の10周年に当たり職員の皆さまに感謝を申し上げ、利用者の皆さま、関係の皆様方の発展を祈ります。

保護者さんからの声

10年に思う

でい・さくさべ保護者　石井隆子

10周年、おめでとうございます。

歳月の流れは早いものです。息子も10年、変わることなく伸び伸びと通所しております。

楽しい場所はよく解っていて、どんなに遅くなっても悪びれる様子もなくマイペースです。この10年、９時に施設に入れた日は、５本の指で足りるのではないでしょうか。無駄な言葉だと思いつつ、「早く起きなさい」「もう行くヨ」「夜もっと早く寝なさい」と私もまた10年、声を掛け続けてきました。多分これからも…。

将来のことが、チラチラ頭をかすめますが、切羽詰った気持にはなれず、今は「でい・さくさべ」に頼りきりの状態です。職員さんのそれぞれの利用者さんに合う活動やアドバイス、そして忍耐力、頭が下がる思いで居ります。

行政はこれからも目まぐるしく変わっていくのでしょうが、「でい・さくさべ」は、いつの時も楽しい場所、長く通える施設であってほしいと願っております。私達保護者も将来を見据えて、行動を起こさなければと思います。

「法人と二人三脚10年間」

でい・まさご保護者　三枝栄一

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会、法人設立10周年おめでとうございます。
心からお祝い申し上げます。

10年１昔といいますが、本によれば「だいたい10年を一区切りとして、人事や社会に大きな変化を見ることができる」とあります。今日の法人発展過程を見ますと的を得た言葉で、正に歴史のひとコマを見るようです。

関係する皆様の日々の努力と情熱の賜で、お陰様で我が息子も「でい･さくさべ」のスタートから現在の「でい・まさご」までアッという間の10年間でしたが、毎日元気に通所する姿を見るにつけ、深く感謝の気持ちで一杯の昨今です。

この際、この10年間をタイムスリップして、障害者に関係した人々の重なる努力と築かれてきた原点を振り返ることも必要でしょう。

その間、福祉サービスも措置から契約へ、入所施設から地域生活へと大転換がありました。しかし、残念ながら地域生活への移行といっても、障害者が希望する形での計画的、具体的な施策が実現されるまでには時間がかかりそうです。一般の社会情勢も将来への明るい展望は少なく、ましてや障害者の置かれた環境は更に厳しいと思います。だからこそ、社会的使命として、法人には一層大きなウエイトが置かれ、その期待するところは大きいです。

今、傘下の通所施設は共に「地域に根ざした開かれた施設」を目指すことを理念に掲げておりますが、我々保護者もまったく同感です。障害者本人達が、ごく普通の生活ができる住みやすい地域社会づくり、それは「親なき後の心配」の解決にもつながることです。
我らの法人を信頼し、協力関係を密にして、微力ながら応援に努めていきます。

今後とも、法人のますますのご発展をお祈りいたしまして、お祝いの言葉といたします。

保護者さんからの声

法人創立10周年おめでとうございます

でい・まさご保護者　林　秀雄

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会の創立10周年、おめでとうございます。

私の次男正記がお世話になっている知的障害者通所更生施設「でい・まさご」は、美浜区真砂に開所以来５年が経過し、利用者34名の千葉西警察署近くのビル内にあるアットホームな更生施設です。

利用者は「まつぼっくり」「ほかほか」「大空」「めばえ」のパートに分かれ、アルミ缶プレス・ビーズ作り、うどん作り・配膳作業、園芸・木工活動、織物工房などに毎日、活き活きと活動しております。

利用者の父母が中心となっているまさご会は、利用者の環境充実、まさご祭り、施設見学、講演会、懇親会等で、毎月会合を持って、勉強したり、懇親を深めたりしております。

やはり親として一番の心配は、知的障害のあるわが子を残して自分が先立つことです。昨年も、千葉市手をつなぐ育成会久保田前会長に講演をお願いしたり、船橋市の「親心の記録」について、２か月にわたり勉強をしました。今年もPACガーディアンズの田川氏に成年後見制度についての講演をお願いしました。まだまだ大丈夫だと思っていても、親は確実に一歳ずつ年を取ります。願わくば安心して、知的障害のあるわが子を残すことのできるような行政支援制度ができることを望みます。

「でい・まさご」は、利用者の親たちも非常に協力的で、仲良く活動しております。特に新年会は出席率もよく、お酒をいただき懇親を深め、カラオケもたくさんの人が参加しています。親も自分の人生にがんばっています。

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会が、施設内容共により充実され、たくさんの知的障害者が楽しく、活き活きと生活する場、集う場として、更に飛躍されんことを祈ります。

ボランティアさんからの声

いつの間にか９年

でい･さくさべ　ボランティア　森田多賀子

「社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会」の創立10周年、おめでとうございます。

パートの仕事を退職し、何か自分に出来る事はないかと、市のボランティアセンターに相談していた時に、“こてはし温水プールで水泳のお手伝いをしてください。でい･さくさべ”というチラシが目に留まりました。これが、でい･さくさべとの出会いでした。ボランティア面接の時の「外部の方が来て下さるだけで良いのです」の一言を頼りに、水泳の補助としてスタートする事になりました。

初日、マイクロバスに乗ったのですが、バスの中には、体格の良い方、車イスの方など、こんな小さな私がお役に立つのかと不安になりました。しかし着替えを手伝いいざプールに入ると、水中で重力から解放された車イスの方の歓喜の声が何度もプールに響いたり、その他たくさんの利用者の方の笑顔を目の当たりにし、不安が少し解消されていきました。途中からインストラクターさんの指導もあり水泳を楽しみ、25mを泳げる方も出てきました。

その後には、陶芸の「あしあと」に加わりましたが、今にして思えば職員さんはハラハラされていた事と思います。せっかく集中し、作陶されているのに声をかけたり、手を貸しそうになったり…。何をどうして良いのやら分からないままでしたが不思議と帰るときの私の心はゆったりとして、又来よう、休まずに来ようと思えました。

ボランティアとして参加させていただいて久しくなりますが、いつも感心するのが職員さんがイライラ、バタバタされる様子を見たことがなく、何時も礼儀正しく、穏やかなことです。しかもアクシデントには機敏に対応されます。本当に学ぶべきところが多く頭が下がります。こんな雰囲気の中だから、長くボランティアを続けてこられたのでしょう。

私がでい･さくさべに来てお役に立ったとは思えないのですが、でい･さくさべは、私を成長させて下さったと感謝しています。続けられる限りボランティアを頑張りたいと思います。そしてでい･さくさべが又新しい歴史を刻んでいかれますように、お祈りします。

笑顔をありがとう

でい・さくさべ　ボランティア　太下みどり

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会設立10周年おめでとうございます。

私と「でい･さくさべ」との出会いは、社会福祉協議会主催のボランティア養成講座を受講した際、施設実習で一日お世話になった時から始まります。サンライズでの水撒き、土作り等の作業の体験は楽しかったのですが、それでも、今までお付き合いしたことがなかった障害者の方の中に入っていく事が不安でした。ボランティアは「何かをしようとするのではなく、そっとそばに寄り添っているだけでいいのです」という、夏目施設長のお話を思い出して、“あんず”グループの散歩のお手伝いにチャレンジしてから、いつの間にか６年半がたちました。

散歩の途中、風や、木漏れ日や、不二家の看板に満面の笑顔を見せてくれたり、全身で音楽を楽しんでいる純真無垢な“あんず”の皆さんに癒され、豊かな気持ちになっている自分自身に驚いています。優しい時間を共有できることに喜びを感じています。

また２年余りの送迎の仕事や、あるいはバザー、バス旅行等の行事への参加を通して、他

ボランティアさんからの声

の利用者さんとの交流も出来、声を掛け合える楽しさも味わってきました。
　職員の方々には、多くのことを教えていただきました。利用者さんとの対応などで、「あっそうなのか」と気づかされる事が幾度もあります。
　６年半の間には、大勢のボランティア仲間との出会いもありました。外国の宣教師さん、ご住職、“お父さん”“お母さん”、小中学生の皆さん。それぞれの方から、散歩を通して、良い刺激をいただいてきています。
「でい･さくさべ」での、今までの貴重な体験と出会いに感謝し、これからもささやかなお手伝いを続けていけたらと思っています。
　個性あふれる皆さんの、笑顔に会うために。

「ボランティア雑感」

でい・まさご　ボランティア　佐々木一男

1. どうして　と　まだ
　五年前に、「どうして」から始まった定期的ボランティアは「まだ」続けています。
社会と繋がっていたい、自分にはない若さを求め、暇潰し、・・・・今は居場所となり「ありがとう」を沢山頂いています。

2. ありがとう　と　だめ
　私にとって、非日常的な言葉「ありがとう」いろいろな意味を含めて、一番頂いている私、「だめ･だめ」が飛び回っている日常的な私。この言葉は、成長する過程において重要とされ、物事を判断する基準、行為、その結果として「ありがとう、だめ」に分かれる。
「ありがとう」を沢山頂くために、職員は研修等、利用者は専門医の指導等、ボランティアは職員の行動等を見ながら真似し、状況を見て行動しながらお互いに「ありがとう」を求めて活動していきたいものである。

3. 楽しそうな顔　から　自信をもった顔に
　楽しそうな昼休みの顔、帰り支度のきびきびした顔、活動中の眠そうな顔、判断を求められ困ったような顔等、さまざまな表情を見せてくれる彼らと彼女たち。でも見ること、見せることが出来ない顔、それは「自信を持った青年の顔」。何時の日か、きっと見せてくれると信じて、ボランティアをもう少し続けたいものである。

「ボランティアに参加して」

でい・まさご　ボランティア　堂前　隆

　私が初めて「でい・まさご」の稲毛の浜の清掃活動に参加した時、職員の方から「こちらがＯさんです」と紹介され、あわてて「堂前です」と挨拶をしました。最初は、お互いに戸惑いを感じ、私自身も多少不安がありました。一時間余りの清掃活動が無事終了した時は、ほっとしたと同時に、今後どのように接し、コミュニケーションをとればよいかわかりませんでした。
　その後も、職員の方の計らいで、Ｏさんと一緒に行動する機会が多くなり、徐々に顔を覚

ボランティアさんからの声

えてもらい、今では友達感覚で話をする仲になりました。稲毛の浜に出向くときには、同じバスでＯさんに会い、「朝青龍が勝った。強いよ。優勝するよ」「巨人が勝った。優勝するよ」などと、新検見川に着くまで何度も話してくれます。今では、月２回Ｏさんに会えることが、私の楽しみの一つです。

Ｏさんは気だてもよく、やさしい好青年です。ゆっくりでいいから、一人立ちする事を願っています。社会に出れば、嫌なこと、辛いこと、わからないことなどいっぱいあります。でも、少しずつ勉強していけば必ず自立できると私はそう信じています。微力ながら応援しています。がんばってください！！

利　用　者　さ　ん　の　声

【でい・さくさべ＆でい・まさご】

「10年をみんなで振り返ろう！」と、利用者の代表として、さんふらわあ会（でい・さくさべ自治会）と、リーダー会（でい・まさご自治会）のメンバーに集まってもらい、話をしてもらいました。

職員：手をつなぐ育成会が10歳になりましたが、過去の写真を見ながら、振り返ってみましょう。

川島：バザー頑張りました。作品の場所を案内したり、実習生を案内して回ったりしました。それから看板作りをやったりしました。最後は片付けをしました。まさごは、どうなってるの？

金原：司会した。テープカットした。

林　：うどん売った。

大塚：作品の販売。

川島：まさごのバザーに１回行った。10月10日。雨止んで見に行った。「さくさべの作品売れるかな」と思って。

職員：さくさべ・まさごのバザーでは、皆さんは何をやりましたか？

林　：ダンス。

下村：2008年のバザーで、ダンスクラブ発表やりました。

齋藤：バザー委員会あった。

鈴木：ビーズ売った。

谷川：ゲーム。音楽クラブ司会やった。

林　：うどん。

下村：今年は2009年バザーで、焼きそば、おでん、かき氷とか、おいしかったです。

大塚：さくさべバザーで、うどん買いました。

下村：元会長の佐々木君が来てた。

髙橋：佐々木さんは前の会長だ。どれくらい前だ？

村上：だいぶ経つんじゃない？

髙橋：選挙はいつだっけ？

川島：１年か２年ぐらい前じゃないか？

髙橋：じゃあ２年前だ。

下村：選挙やって、僕は書記やりました。その時、佐々木会長と、まさごに行きました。（※前会長の佐々木さんは、でい・まさごとの交流を公約に掲げて実行していました。）

利　用　者　さ　ん　の　声

年末スペシャル～写真を見て～

一同：あ！あー！写っている。
藤本：店があった。
髙橋：いろいろあったね。
林　：うどん・カレー・職員のバンド・写真館。
髙橋：すし屋があったかな。
谷川：シチュー。
下村：2008年の年末スペシャルは、お化け屋敷があった。
小川：写真くれるとこあった。なんかね、小さい写真でね、シールでした。（プリクラ）
伊藤：職員の男の人がおかまになって、女の人はメイドになって喫茶をやってたのよ。

髙橋：あとラーメン屋だ。
林　：劇。りんご。赤ずきん。（白雪姫）
千草：歌。「羞恥心」。
菱田：職員が「シャネルズ」やってたけど、ちょっと気持ち悪かったです。
齋藤：ご飯食べた。
下村：エドはるみがいた。
髙橋：職員がやってたね。
大塚：野球の劇をやりました。
菱田：僕も出ました。田村さんとか。
髙橋：長谷川さんもいた。

～齋藤さんが、旅行の写真を見つける。～

齋藤：かわいー。いろいろあった。ねー。
髙橋：いろいろ行ってるよ。マザー牧場と鴨川シーワールド。鴨川は１泊したよ。
村上：新幹線に乗った。京都、名古屋、大阪。
小川さんは？

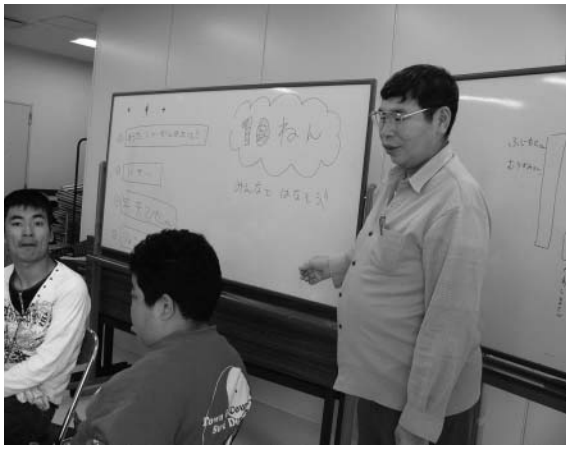
小川：バスで行った。
藤本：京都行った。
金原：日光江戸村。
林　：日光猿軍団。
髙橋：箱根は１泊じゃないよ。
日帰りだけど。
柳沢：行ったことないけど、これからいってみたい。鬼怒川とか。
林　：山。風呂。大塚さんは？

大塚：宴会。
林　：お酒。写真。
菱田：お酒！？（笑）
大塚：鉄道博物館に行く。
川島：旅行委員会があって、それで決める。
髙橋：アンケートで決めたコースならいい。３つに分かれた。
齋藤：バスじゃない？
村上：カラオケ。
齋藤：楽しいよ。ねー。
林　：ポニョ。
一同：あはは。

利　用　者　さ　ん　の　声

職員：話が盛り上がってきましたが、さくさべ・まさごは楽しいですか？最後にみなさんが、普段頑張っている事を教えてください。

伊藤：やっぱり、ここにいると楽しい。活動も。みんなとお話することも。
林　：園芸。
鈴木：缶つぶし、ビーズ。
川島：陶芸。ろくろ。自分で考えてやってる。
柳沢：電動ろくろでどんぶりを作りました。それが今年、販売で売れるといい。
藤本：作業頑張っている。園芸。土作り。
村上：木工。ガスバーナー。
下村：サンライズで園芸とか地域清掃とかやりました。今は、陶芸。少し慣れてきました。
髙橋：最初は陶芸。それからビーズ。今はポパイをやっています。いろいろ変わったけど、良かったです。
菱田：作品展とか、バザーとか楽しかった。
伊藤：これからもずっとやって欲しい。バザーも年末も旅行も。



今回お話をしてくださった皆様
＜でい・さくさべ　さんふらわあ会＞
・川島正幸　さん（会長）
・小川俊幸　さん（副会長）
・伊藤公恵　さん（副会長）
・下村文信　さん（書記）
・渡邉力也　さん（書記）
・村上晴茂　さん（会計）
・髙橋三津雄　さん（会計）
・柳澤政男　さん（役員）
・齋藤祐介　さん（役員）
・藤本　毅　さん（役員）
・土屋雅幸　さん（役員）

＜でい・まさご　リーダー会＞
・林　正記　さん（役員）
・大塚　健　さん（役員）
・谷川　実　さん（役員）
・鈴木千草　さん（役員）
・金原徹明　さん（役員）
・菱田　真　さん（役員）

社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会
創立10周年記念誌

発行日　平成21年11月吉日
発行者　社会福祉法人千葉市手をつなぐ育成会
でい・さくさべ
〒263-0015 千葉市稲毛区作草部2-4-5
TEL：043-206-3861
FAX：043-206-3863
でい・まさご
〒261-0011 千葉市美浜区真砂2-1-12
プラザ真砂ビル内
TEL：043-277-6641
FAX：043-277-6606

印　刷　三陽工業株式会社